
Mr konann edogawa

チャーリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mr konan edogawa

【Zコード】

Z8640Z

【作者名】

チャーリー

【あらすじ】

江戸川コナンになつて三年、ひとつ転機が訪れる。黒の組織のテロ対策ユニット「CTU-typeB」ができたのだ。コナンは協力者としてアメリカに向かう。はたして彼の運命はどうなるのだろうか。そしてコナンの恋の行方は。

第一部第一話

桜が散っている通学路を、三年前より大きくなつた五人が仲良く歩いている。

新学期が始まるこの日、上藤新一こと江戸川コナンは、もつすぐ訪れる壮絶な戦いなど予想もしていなかつた。

体が小さくなつて小学一年生の生活が始まつたのもつかの間、すでに四年生なつてしまつ自分に多少の危機感を感じていた。

灰原が口を開いた。

「あら、どうしたの？ こつものキザな名探偵さんの顔じゃないわね。

」

コナンが口を開いた。

「最近思つただ。もう一度と元の体には戻れないんじゃないかつてな。」

「あらあたしを信じてないよつな」と言ひじやない？

「別にそういう意味では言ひてねーよ。今まで何回か組織と戦つてきたけど、一回としてあの薬のことにはたどり着けなかつたしな。まあこんなこと言つてるよつじやオマーを守れないかもな。」

こんな調子で始業式の今日は早く学校が終わつたので、灰原が博士の家に彼を呼んだ。

「どうしたんじゃ新一、今朝弱気なことを言つていた袁君が心配してたぞい。」

「わりーな。博士まで心配をせりまつて。」

しばらくの沈黙。とするとコナンの携帯が鳴った。コナンは席をはずし、電話に出た。

「ハーサイ、クールキッド、お久しぶりでーす。」

「ジョディ先生。どうしたの。」

電話の主FBIのジョディ先生だった。この電話がすべてのはじまりだった。

「大ニユースよ。」

「どうしたの、そんな急なこと?」

「ええ、合衆国政府が本格的に組織壊滅に乗り出したの。それで、CIAやFBIなどの関係者による黒の組織のテロ対策ユニット、<CTU-type B>がロサンゼルスにできたの。パーマー元大統領と、彼がもつとも信頼する人物ジャック・バウアーによつてね。」

「それ本当なの?」

「ええ、それで聞きたいんだけど、あなたこっちに来ない?もちろん命の保障はできないわ。ただジャックもあなたに興味があるよう

だし。」

「わかった。行ってやる。じやねえかー。アメリカになーー。」

「ただし条件があるわ。」

「その条件はとても過酷なものだったが、コナンは

「組織を倒すためなら話すよ。」

「もうわかったわ、じゃあ気をつけて来てね。」

「うそ、それじゃあ」

「ナンの瞳はいつも探偵の瞳に戻った。そして博士と灰原はこのことを告げた。

「何じゃと、それは本當か新ーー。」

博士が最初に口を開いた。

「ああ、ただ条件を一つ出されたよ。」

「条件?」

「ひとつは、灰原を連れてくること。もうひとつは俺たちのことを洗いざらす」と。

「ひとつ待つて、なんで今まで行かないとこないの?」

灰原が声を荒げた。当然だわ。コナンもこの答えは予想していた。
灰原の言葉にコナンは

「確かにわうだ。だけどCTOの人たちはみんな例の薬のことまでつかんでいるんだ。この機を逃すてはねーザ。」

「わう・・・じゃあ仕方ないわね。」

「じゃが一体向いづでせじづあるんじや。」

「幸い本部はロサンゼルスだ。だから、父さんと母さんの家に泊まるよ。」

「で、いつ発つ。アメリカに。」

「なるべく早くしたい。それに俺と灰原のことを話して、出国審査をパスできるように先生に言っておかないとな。」

「ナン心に渴きを知らない好奇心がわき出していた。」

第一部第一話（後書き）

はじめて書きました。ほほ頭にスッと浮かんだ通りに書いてこるので、ミスもあるかもしれません、読んでください。

「で、その探偵さんにはこれからどうしてこられるの？」

「そりだな、まあおっちゃんと蘭、服部、父さんと母さんに事情を説明しなきやな。もちろんおっちゃんや蘭には本当のことは言えねーからな。西親がオマーと俺を引き取つてアメリカで生活するつてことやつけていくよ。後学校は蘭たちの理由でアメリカへ転校するつて博士に話をつけてもらひつよ。」

「確かにそれが一番大事じやな。よしわしに任せておけ」

「頼んだぜ、博士。」

といひでまたコナンの携帯が鳴つた。

「ハイ！ クールギッズ！ 哀チヤーン！」 ちやんと話しましたか？」

相手は「カンの予想に反せず、シミテイ先生だ」と答えた。

ああ、話したよ。でも、あの条件も入れてくれる感じよ。

L

「 そお、よかつたわ。さうで」 れからあなたたちがいるわ。

「とりあえずアメリカへ行く」とをみんなに言ひよ。」

「そうとじろで何か問題はないかしら。」

「実はとても重要な問題があるんだ。」

「重要な問題?」

「実は僕と灰原はパスポートを取ることができないんだ。」

「なぜ?」

ジョディは感慨深く言つて、コナンが決意を固めていった。

「僕たちは今の姿が本当の姿じゃないんだ。」

「どうして?」

「僕の正体は、高校生探偵工藤新一なんだ。」

「何ですって!」

ジョディが驚きの声をあげた。当然だろつ。まさか人間が約十歳も若返るなんて常識では考えられないことだからだ。

「でもなぜそんな姿に!..」

「ナンはあの日のことを話した。トロピカルランドの事件で遭遇した黒ずくめの男のことを、その男が取引をしていたので影に隠れて一部始終を見たこと、すると後ろから来た男に襲われ例の「ATP X 4869」を飲まされ体が縮んだことを。

「やつだったの。じゃあ哀チヤーンは何者なの?」

「それは彼女の口から直接言つぱうがいいと思ひます。」

「そう言つと、灰原に携帯を渡した。

灰原は正直に話した。本名が宮野志保といふこと、組織の一員だつた両親の影響で「コードネーム「シェリー」として新一が飲まされた薬「ATPX4869」を開発したこと、唯一の家族だつた姉明美を殺され組織に反抗し監禁され自分も「ATPX4869」を飲んで体が縮んだことを。

「そうだったの。じゃああなたたちの本名工藤新一、宮野志保で出国審査を受けるのは危険ね。そういうことならジャックから政府に言つて何か策を立ててもらつよつに働きかけてみるわ。」

「ありがとうございます先生。」

「じゃあ詳しい日程が決まつたらまた連絡するわ。GOOD LUCK」

そう言つて長い電話が終わつた。

「で、何だつて」

「アメリカ政府が日本政府に俺たちを出国するよう働きかけてくれるみてーだ。」

「そう、さすがに国家間の機密ともなればさすがの彼らも手だしできないでしようしね。」

「ああ、それに迎えに来るのはジャックらしくな。」

「そのジャックとは何者なんじゃ。」

「ジャックバウアー。パーマー元大統領が最も信頼する強い愛国心と正義感を持ち、いざとなつたら手段を選ばず行動するたくましい男だ。」

「なるほど、彼なら何が何でも君たちを守ってくれそうじゃな。」

「で、彼はこつこつちかづくるのがしきり?」

「わからぬ一ナビ、やつ遠くなこひ時」へ。やつと顔を合わせるのはな。」

「まあ楽しみしてるわ。パー、マーがもつとも信頼する男をね。」

「それより新一、早く蘭君たち三人のことを知らせたらどうがいいや。」「そうだな、じゃあ俺はいつたん探偵事務所に戻るけど、何かあつたらすぐに連絡しろよ。特に灰原は気をつけるよ。」

「ええ、頼りにしてるわよ、探偵さん。」

「じゃあな。」

そう言ってコナンは探偵事務所に向かっていた。途中彼は命にかけて組織立ち向かって潰すことを、蘭をはじめとする仲間を絶対死なせないことを誓った。

第三話（前書き）

もともとこの「一話」の「二話」で一話分としようとしたのですが、残念ながら一話になってしまいました。長々しくてすいません。ページを開いてくれた方、つまらないかもせんが、最後まで読んでくれれば幸いです。

コナンは探偵事務所に向かっていた。思えば自分がコナンになつてからは、彼らにどれほど迷惑かけたことだろうか？組織に背中を取られ命を奪われかけたこともあった。だからそんな彼らのためにもこの自分自身の手で組織を潰さなければ、心を奮い立たせていた。

「ただいまー！」

「コナンがいつものように子供らしき大きな声を出しながら探偵事務所の上にある毛利小五郎の自宅玄関のドアを開けた。すると奥のほうから先に帰っていた蘭の声が聞こえてきた。

「おかえり、コナン君今までどこに行っていたのー？心配したんだよ。」

いつも聞こえていた蘭の言葉。しかしそんな言葉を聞けるのも後何回もないことを悟っていたコナンはどこか名残惜しく思つた。コナンは部屋にランドセルを置きトイレに入ると、早速今日のことを話す相手である西の高校生探偵服部平次と、工藤新一の両親である工藤優作、有紀子夫妻に電話をかけた。まずかけたのは服部だった。コナンは今日の出来事を服部に話を伝えると

「ホンマかー！ それー！」

とおなじみの大坂弁で言つた。

「全部事実だよ。だから俺が日本にいられる時間はあまりないんだ。

「

「そりやつたんか。ほなまた連絡してくれや。見送りに行つたるさかい。」「

「ああ、ありがとな服部じやあな・・・」

「あ、工藤！ ！ ちょい待たんかい！ ！」

ん、なんだよ。

「絶対に生きて帰ってきて来るんやで。絶対やそー！」

ああ、あたりめーだ、ハーハ、じやあな、

そう言って電話を切った。

次に工藤夫妻に電話をかけた。

よ
ね。
」

電話を取って事情を聞いた新一の母有紀子が不機嫌そには言った

ああ もちろん愛したよ

「ちよつと新ちゃん!! あなた死にたいの!! それによつよつて哀ちゃんまで巻き込んで!! あんた何様のつもり!! !!」

母親の厳しい言葉が、口ナンの耳に刺さる。しかし口ナンは

「政府が動いているんだ。もう後戻りはできねーんだよ！だから・

・・・だから・・・母さんたちは口を出しつづくるんじやねー!ー!「

コナンが声を荒げた。もうコナンの精神年齢は二十一歳だ。いや彼が今までぐぐりぬけてきた試練を踏まえるとそれより上かもしない。そんな大人の風格と態度が伝わる言葉を聞いた有紀子は

「本気なのね、新ちゃん。そうよね、もうあなたは子供じゃないのよね・・・、新ちゃん・・・」

どんな困難にも立ち向かって成長してきた我が子への喜びと寂しさの涙を流しながら有紀子は言つた。

「母さん、心配する気持ちも分からなくもねー。だけど・・だから
じゃ、この俺の手でけりをつけなきゃいけないんだ！！」

「でももつとじぐらにあたしたちの」と、頼つてよ。

「大丈夫だつて。これから母さんたちのことを頼らなきや いけない
こともあるかもしけないからその時はよろしく頼むぜ！」

「ええ、じゃそろそろ切るわね、またね新ちゃん！」

「ああ父さん」よろしくな。じやあ。

かれこれ一時間はトイレで話していただろうか。気がつくと夕食の準備が終つたらしくいいにおいが漂つてくる。すると

「ナン君ー、せんでもたねよー。」

ところの蘭の声が聞こえて来た。そしてリビングに向かうとすでに蘭

と小五郎が座つて待つていた。

「いただきまーす」

三人の大きな声がした。しばらくして「ナンが重い口を開いた。

「あのね、おじさん、蘭姉ちゃん、大事な話があるんだ。」

「何だよ。話つて。」

「僕ね、灰原さんとアメリカへ行くことになつたんだ。それで近いうちに両親の代理の人日本に来るんだ。」

「そんなん、何で急に「ナン君と哀ちゃんがいなくなつちやうの?」

「今までやつていた仕事がこの前やつと終わつたんだつて。それで博士に電話して決まつたことなんだ。」

「今日頼んだばかりだから、早くてあと四日か五日ぐらいかな。で、その代理つていうのはいつ来るんだ。」

「今日頼んだばかりだから、早くてあと四日か五日ぐらいかな。」

「そう、じゃあ向こうに行く前にお別れパーティやらない?博士や光彦君たちも誘つて。」

「そうだな、蘭明日あのじやじや馬娘に頼んでみてくれ。」

「わかった。多分園子ならいい返事が聞けると思つわ。」

「「」あんね今までお世話をなつたの、そんないじまでじつもひがつ
ちやつて。」

「「ひひん、いーのよ。だつて新一がいなくなつてずっと私のことを
支えてくれたのは、コナン君だもん。せひんとお礼もしなきやね。」

「あいがとう蘭姉ちゃん。じゃあ明日も学校だから寝るね。お休み
なさい。」

「お休みコナン君。」

そう言つてコナンは布団をかぶつた。そしてしばりへコナンの瞳に
は涙が流れていった。

第四話（前書き）

第三話ミス、だらけだつたんだんで訂正しました。ほんと変な文章ですが、読んでくれたら幸いです。後読んでいてお気つきな点があれば、どんどん言ってください。よろしくお願ひします。

翌日、早速蘭は園子にお別れパーティーのことを話した。園子は「えーーーあのガキンチョ二人が「A」に転校するーーー?。嘘、マジーーー!」

と声を張り上げた。

「声が大きいわよ、園子。」

蘭がつぶやいた。

「まあ、蘭の頼みは断れないわね。いいわ、今日帰つたらパパに話しどくわね。後のことば、この推理女王の鈴木園子様に任せなさいーーー!」

「うん、ありがとね園子。」

こうしてコナンと灰原のお別れパーティーの開催が決まったのだった。

ちょうどその頃、阿笠博士は「どうと来るべき戦いに備えて、」コナンのメカの改造および開発、そして灰原の護身用のメカ開発を天才発明家と自負するにふさわしい手つきで行っていた。特に今回は黒の組織が相手とあって大幅なパワーアップを予定していた。その成果はまた後日としておこう。

そして、コナンと灰原は残りわずかしかない帝丹小学校の生活を。

「あ、愛しの彼女のところへ戻らなくてもいいの、探偵さん？」

「あ、愛しの彼女のところへ戻らなくてもいいの、探偵さん？」

と冷やかすと

「ああ、そつなんだけど何か見ていいられないんだよ。あんな寂しそうな蘭の顔をな。」

「だつたら江藤新一として電話してあげたらいんじゃなかっしら。」

「

とコナンが寂しそうに言つた。

「いや、江藤新一として電話をすれば、それこそ俺との別れがつらくなるだけさ。」

「そうね。今の彼女にしてあげあれることはないのね。私も、あなたも・・・」

しばらくの沈黙。すると、ここでコナンの携帯にメールが入った」。送り主「CTU-typeB」のジャックバウアーだ。

「親愛なる江戸川・・・いや江藤新一君。はじめまして、CTU-typeBのジャックバウアーだ。あなたたちのことは、ジョディ捜査官から聞いています。今回、私たちCTU-typeBの捜査に協力してもらえることを大変うれしく思つてゐる。

さて、あなたたちの出国審査についてだがCTU-typeB総責任者デイビッド・ペーマー元大統領から日本政府に圧力をかけて、私と同伴なら出国審査をパスできる手を打つてもらつた。そして君た

ちにはジョンキラー大統領から、宮野志保の一切の罪にはとわないという正式な文書も頂いた。君たちは安心してアメリカへ来てほしい。

ところで私はチャーター機に乗つて木曜日の夜に成田に着く予定だ。その後しばらく君たちの護衛をさせてもらいながら今後のこと話を聞いていくつもりでいる。とりあえず言えることは、出国は来週月曜日の早朝を予定している。そのつもりで準備していく。よろしく頼んだぞ。

ジャッ

クバウアー】

「どうやら今週いつぱいが期限のようね。彼女パーティを計画しているんでしょ? 田取りもあるし早めに連絡したほうがいいんじゃないかしら?」

「もうだな。じゃあ蘭連絡するから、オマーはジャックに返事をしておいてくれ。」

「はいはい」

コナンは灰原に携帯を渡し、博士の家の固定電話を手に取り、蘭に電話をかけた。

「もしもし、蘭姉ちゃん?」

「うん、どうしたの? コナン君?」

「実はね、代理の人から連絡があつてアメリカに行く日が決まったんだ。」

「せう、で、いつなの？」

「来週の月曜日の早朝だつてさ。」

「やひ、じやあ園子に頼んでパーティは土曜日にしてもらいましょ。服部君たちと、お父さんたちと、警察関係者と、探偵団のみんなと、博士には私が伝えられるから。楽しみにしてね。」

「うん、じやあよひしくね。バイバイ蘭姉ちゃん。」

「なるべく早く帰つてくるのよ。」

「はーい。」

「ひつも終わつたわよ。」

電話が終わると、コナンは電話を戻してソファにもたれかつた。

灰原がそつ言ひとコナンの座つてこるソファの向かいにある椅子に腰掛けた。

「こよこよね。もうちよつとで本当の戦いが始まるのね。」

「ああ、どんだけかかるかはわからねーが叩き潰すだけだ。」

「ふふ、期待してゐるわよ。探偵さん。」

「オウ、任せつけ。」

そう言つてコナンは灰原のほうへ行き、彼女の肩に手をかけた。

「ゼッテー守つてやつからな。」

「・・・・頼んだわよ・・」

灰原がぼそつといった。そして一人は再びソファに戻り安らかなひと時を味わつた。

第五話（前書き）

ジャックなどの24メンバーのセリフですが、英語だと思ってください。実際「ナン」と灰原は、ネイティブの英語を聞くこともしゃべることもできるので彼らの解釈だと思ってください。

第五話

一木曜日午後七時半。成田国際空港—

「「」がジャパンか。思ったより悪くないな。」

そう言つて到着口から一人の男が日本に来た。ジャックバウアーだ。

「確かに予定では、H C T U - t y p e B へ日本支部の最高責任者が直々に来る予定だが。」

「お待ちしていました。ようこそ日本へ。ミスター・バウアー」

「ああ、どうも。ミスター・アカイ。」

「では、いらっしゃへ。車を回してきます。」

「サンクス。」

そう言つて彼らは一路コナンのいる米花町へ向かつた。その途中赤井の携帯に電話が入つた。

「ああ、おれだ・・・何? それは本当か!・・・よしわかつた。ジャックを届け次第すぐ作戦会議を行う。ああ、よろしく頼んだ。」

「どうした?」

ジャックが言つた。

「日本に潜伏している組織の探り屋バー・ボンが今回の件に気づいて

ジンに連絡したところ、一人を抹殺するように言つたとキールから連絡が入りました。バー・ボンは更なる情報を求めて彼らに接近するでしょう。我々はパーティー会場および空港での警備を行うので、あなたには彼らの警護をお願いします。」

「了解。このことはJ-Aの本部にも伝えてくれ。向こうから警備員および協力者の位置を日本支部経由で俺の端末に送れるように調整してくれ。本部の調整はクロエ。オブライエンで頼む。」

「わかりました。そう本部に連絡しておきます。」

「頼んだぞ。」

そういうしていのうちにジャックの拠点、米花町の隣杯戸町にある杯戸シティホテルに到着した。ここでジャックはパーティー前に二人に今の捜査状況や今後の動きについて説明するつもりだった。しかしバーボンが動いている以上それはできない。よつて赤井の計らいで工藤邸で行うことになった。ジャックは彼らにメールを送った。

「明日の帰りにクドウ邸に寄つてほしい。重大な話がある。」

ヤックバウアー

ジ

翌日、コナンと灰原はいつものように学校へ向かっていた。今日の六時間目の学活では一人のお別れ会が行われる。もちろん担任で探偵団顧問の小林先生と探偵団三人の計画だ。

「オメーと学校に行くのはこれが最後か・・・」

「あら、あたしとじや嫌かしら。江戸川君。まあ今のあなたの心情

はこうでじょうね。もつ愛しの彼女に見送られて学校に行けなくて寂しいってね。」

「バ、バー口。そんなんじゃねーよ。オメーまで俺を冷やかすのかよ、オメー。」

コナンがいつも同じ赤い顔で言った。しかしいつもよりも顔が赤くなつていなかつた。

「そんなんじゃないってことは、今はどうこう関係なのかしら？探偵さん？」

「別に、ただの幼馴染だよ。」

「せう・・・・」

しばりべの沈黙。するとそこにつきの三人がそろつて声をかけた。

「おはよっ、哀ちゃん、コナン君。」

「いつもながら、一人ともクールですね。」

「腹が減つて何もしゃべる気がねーんじゃねーか？」

（それはオメーだけだつて。）

「あ、そうだ。ちょっと灰原いいか？」
「何かしら？」

そう言うと灰原の耳元でこう囁いた。

「帰りに俺たちに来てくれねーか?ちょっとジャックが話をしたいらしくから。」

「あら、予定ではジャックと今後のことを話すのは明日のパーティーの前じゃなかつたかしら?」

「その予定だつたんうけど、昨夜連絡がきた。どうやら俺たちのことがやつらにバレそうなんだ。」

「仕方ないわね。じゃあ帰りも一緒につてわけね。」

「別にんなことまで言つてねーよ。おに急がないと遅刻しちまうぞ。」

「

そして六時間目を迎えた。たつた四十五分しかないこの時間に今までの思いを込めるかのようにみんなが一人との惜しみんだ。最後のお別れの言葉は歩美、光彦、元太からだつた。

「哀ちゃん、コナン君離れててもずっとお友達だからね。」

歩美が頬に涙を流しながら言つた。

「向こうでもお元気で過ごしてください。帰つてきたときははやんと連絡してくださーね。」

二人の瞳を見ながら光彦が言つた。

「日本の飯が恋しくなつたらこつでも俺とこに来いよ。ばっかり

御馳走してやるぜ。」

いつもと同じように元太が言った。

まあコナンは、日本の食事が恋しくなつたら真つ先に蘭のもとへ向かうだろつ。

「ありがとな、みんな。今まで楽しかったぜ。」

「ええ、あなたたちのことは決して忘れないわ。」

そして授業終了のチャイムが鳴り、二人が小林先生の両隣に立つて挨拶をした。

帰り道。コナンが言った。

「何かと楽しかつただろ。今まで。」

「ええ、少しば楽しめたわ。それに・・・」

「それになんだよ?」

「別に、なんでもないわ。」

「はあ???」

(あなたと一緒にいれてよかつたなんて言えないわよね。)

そんな会話をしながら、工藤邸へと向かつた。

第六話（前書き）

今後ともよろしくお願いします

夕日の光が米花町をやさしく包み込むように指している。その中を二人の少年と少女が楽しそうにおしゃべりをしながら歩いている。それを後ろから追いかける男。一人は後ろを一回も振り向いていない。男は無線で状況を報告していた。

「ターゲットはまだこちらには気がついていないようだ。これなら作戦を実行できそうだ。」

「了解。何としても一人をジャックに会う前に消してくれ。キャンティ、コルン、間もなく一人がお前たちのスコープの中に入る。とらえ次第二人同時に仲良く逝かせてやれ。」

「オーケー。アタイに任せておきな。ジン。」

「俺、早く、撃ちたい。」

一人が角を曲がった。スナイパーの一人はじっくりと照準を合わせる。

「俺、女。」

「オーケー、アタイは男だ。」

一人は引き金に手をかけた。しかしその時だった。突然上空に警察のヘリコプターがやって来たのだった。

「ジン、頭上に犬のヘリが……」

「これ、やばい。俺たち、捕まる。」

「やむを得ない。キャンティ、コルンずらかれ。犬なんかに捕まるなよ。」

こうして二人は計画を中止して下のバイパーに乗り込み、尾行を撒きながら引き揚げつて行つた。こうして組織日本支部の暗殺計画は失敗に終わった。

「バーボン計画は中止だ。引き続き一人をあたつてくれ。」

「了解。」

そしてジンはアメリカにいる「あの方」といわれる組織のボスにメールを送つた。

「不測の事態につき計画実行不可能。例の一人とジャックが接触します。」

ジンは深いため息をつきながらウォッカに言った。

「日本支部に内通者がいるかもしれない。メンバーの素性を徹底的に洗え。」

「了解しやした。でもなぜ日本にいると? の方の方も調べたしたほうがいいんじゃないですかい?」

「あの方が自分の周りで内通者を野放しにするわけがない。そしてこの作戦を知つていたのは、日本のメンバーと、向こうの一部の幹

部だけだ。C.T.Hが幹部にN.O.Cを仕込めるはずがないだろう。ということは必然的にこちらのメンバーというわけだ。どんな手を使つてでも必ず探し出せ。特にシェリー関係した奴は拷問まがいでもいいから吐かせる。」

「了解しやした。」

そう言つてウォッカは出て行つた。

（ネズミめ、必ず面を拝ませてもうりうぜ。）

「さつきのへりはなんだつたのかしら？それにさつきから誰かにつけられてる気が・・・」

「ああ、おそらく奴らの仲間だ。それにさつきライフルのサー・チャイトが光っていたから多分俺たちを抹殺しようとしたんだろう。ジャックに会つ前にな。」

「それほど警戒しているのね。ジャックバウアーを・・・」

「まあ詳しいことはあの人にはつてから聞こいやせ。」

「そうね。」

そしてコナンたちは工藤邸についた。そこには大柄なアメリカ人と、今この家の住人沖矢昂が立つていた。

「ジャック？」

「君たちか。よろしく、ミスタークドウ、ミスミヤノ。」

「ああ、じゅうじゅうミスター・バウアー。」

「よのしへ。」

「といひで何で歸さんも一緒なの？まさかジャックと知り合ひ？」

「いや、彼は仲間だ。それに化けてこる奴がいる前で正体をばらすわけにはいかないからな。とつとと出できたらどうだ？組織の探し屋バー・ボン！…」

「ふふふ、さすがじゅうじゅう日本支部最高責任者、赤井秀一。」

そこに出できたのは紛れもなく赤井秀一の顔に変装した組織の探し屋バー・ボンだった。

「ならば取引をしようじゃないか？こつちが送つたＺＯＣの「コードネームと正体を教えるから、この場を見逃す。どうだ、悪い提案ではないと思つぜ？」

「ふん、お前たちの送つたＺＯＣとはハイボールのことか？」

「なぜ、そのことを？」

「じゅうじゅうの方がずいぶん優秀だからな。」

「だつたら俺はどうすればいい？」

「やうだな、とつあえず中に入つてもうおつ。話はそれからだ。」

「わかった。今からそつちへ行へりひひひひひ・・・

「その必要はねーぜ。」

「ナンは時計型麻酔銃をバー・ボンに撃つた。

「おやおや、ぼーや。ずいぶ妙なものをもつていろな。

「まあな、こんな体で組織に立ち向かうには必要だからな。」

「さあ、早く中へ。」

こうしてジャック、赤井、ナン、灰原はバー・ボンを藤原に運んだ。そしてバー・ボンが目を覚ますのを待つた。

第六話（後書き）

一話で話が動かすもあつた。今日中にはあとわへ一話載せらるゝ
ついに頑張ります。

第七話（前書き）

お気に入りに登録してくれたかた、本当にありがとうございます。
本日一話目、がんばります。

「しかしよくハイボールの一一番弟子の一人のスコープから逃げ切れたな。」

ジャックが言った。

「実はバー・ボンがつけているのは一人とも気がついていたんだ。それにあの時、後三歩歩いたら引き返すつもりだつたんだ。サーチライトの光が見えていたからね。」

「でも、引き返してもバー・ボンに捕まつてしまつじやないか。」

「うん、だけどあの時赤井さんもいたんだよね。」

「ああ、実は昨日の作戦会議でジャック接触すると知れば奴らも動くと踏んで、私も警護することになったんだ。それで君たち二人を尾行していたあの男を尾行していたんだ。まああのときＬＡからの情報が十分遅かつたら危なかつたがな。」

「まあよかつたよ。ところでバー・ボンは起きているか？」

「まだ寝たままで。おそらく後残り十分ほどでしうけどね。それよりどうして彼が赤井さんだとわかったの？まさか前から知つていたなんてことはないんでしょうね？」

「バーロン何じゃねえよ。これは赤井さんと水無怜奈さんの作戦だよ。」

「じゃあ、何であなたはわかったのよ？」

「沖矢昂のローマ字表記を並べ替えると、AKAI SYUBOUになる。BOOを一と考へると、赤井秀一って訳さ。」

「さすがだな、ぼーや。今日君たちを呼んだのはこれからのことと、明日の」とついて話すためだ。」

「そうだったんだ。」

「では、始めよう。今CITU-typeBには三つの支部がある。LA、NY、そして東京だ。それぞれの支部長はミシェル・デスラー、赤井秀一、そして、カレン・ヘイズだ。本部はLA。これはボスの潜伏場所だからだ。そして総責任者はアメリカ元大統領デイビッド・ペーマーだ。これから君たちは俺と一緒にLAの本部へ行く。そこでまず組織のロサンゼルス支部を潰す。しかし日本支部は黙つていないので、明日のパーティにも手を打つてくるはずだ。だから日本支部からは俺たちが全力で守る。」

「ああ、信じてるぜ。あんたたちのこととな。」

「なるほど、あなたたちなら大丈夫そうね。さあ、もう田は覚めてるんでしょう？…さつわと起きたらどう？…バー・ボンさん。」

「ふん、さすがだな。で、俺をどうする気だ？」

「お前からこれつと黙つて聞き出したいことはない。なので我々の要求を飲んでほしい。そうすれば君をホワイトハウスへ紹介してやる。」

「要求とは。」

「…………」

「なーる。そういうことか。いいぜ。受ければ俺は自由なんだろ?」

「ああ、だが逆らつたらどうなるか、わかっているな。」

「組織と同じ、だろ?」

「だったら厄介なことはするな。」

「はいよ。」

そう言つてバー・ボンを解放し、彼は工藤邸を去つていつた。

「兄貴、明日杯戸シティホテルで例のガキ一人のパーティーが開かれるという情報が探り屋から入りやした。」

「奴からの情報だな。よしあの方に報告しろ。」

「了解。」

数分後。あの方から指令が届いた。

「明日、例の奴らを確実に抹殺しろ。そうすればCTIは完全に機能が停止する。失敗は許されん。例のブツを使っても構わない。」

「よほどの方は警戒されている。ジャックバウアー、赤井秀一、

そして例のガキども一人。の方の命令だ。仕方ない。ウォッカ、例のブツを用意しろ。それから……と……もな。」

「でも兄貴、そんなの何に使うんですかい？」

「ひとつはわかるだろ？。もうひとつはこの作戦に失敗した時の万が一の策だ。」

「了解。」

ウォッカはブツを取りに行つた。ジンはキャンティ、コルン、キル、ベルモットを呼んだ。

数時間後四人がジンの前に集まつた。

「明日パーティーを襲撃する。ベルモット、お前はヒトヒに変装して中の様子を探れ。キャンティ、コルン、お前たちはこのビルで待機だ。最悪そこから四人を殺れ。キール、お前は例のブツを持つて侵入し、ブツをやつた後マスクをして五分後に……。」

「これなら確実にあいつらを葬れるよ。」

「一人、でいい。俺、撃ちたい。」

「随分用心深いのね。」

「よしでは例の場所に明朝十時に落ち合おう。ベルモット、お前にはやつてほしいことがある。このことは俺があの方に知らせる。」

「あいよ。」

そう言って三人は出て行つた。

「何かしら、私に頼みたいことつて。」

「…………」

「なるほど。で、それはどこに？」

「もうすぐウォッカが持つてくる。」

そしてウォッカが来ると、ベルモットそれを持って任務を実行した。

「はい、赤井だが。ふむ。なるほど。ならば……。では、幸運を祈る。」

「どうした。」

「Aからの情報だ。明日の奴らの作戦がわかつた。」

「…………」

「ならばジャックは……。君たち一人は……。俺は……。」

「よしそれで行こう。」

「ならば明日は早い。各自早めに就寝しよう。明日は午前七時ここに集合だ。君たちはチームが警護する。」

「うん、ありがと。赤井さん。」

「じゅあ、また明日。」

いつして一日が終わった。こよこよされがれまな思惑が渦巻く直接対決の時、〔お別れパーティ〕当日を迎える。

第七話（後書き）

沖矢さんの設定は一応こうしました。

第八話（前書き）

さあ、いよいよ対決です。僕のようなチンケな文章で申し訳ありませんが、お楽しみください。

（さあ私たちを止められるかしら？銀の弾丸君たち。）

ベルモットはハーレーで夜の街を駆け抜けていた。

一午前1時—

ベルモットがハーレーを降りた。場所は杯戸シティホテル。館内を警備しているCTUに気がつかないようになんと慎重に作業をしている。

（これでよし。後はこれを置いておけば。）

—その頃—

「こちらバウアー。」

「赤井です。何者かが会場にいます。」

「わかつた。すぐに向かう。」

ジャックは拳銃を取り出し、パーティー会場へと向かった。

暗い会場の中に一つの人影があった。男だ。どうやらCTUの人間らしい。

「怪しい奴を見なかつたか？」

「いいえ、何か物音がすると思つて来た時にはだれもいませんでした。」

「そつか、ひき続き捜索を頼む。」

「了解。」

そう言つてジャックは会場を後にした。部屋に帰り赤井に連絡した。

「赤井、俺だ。」

「どうでした?..」

「俺の着く前に捜査官が様子をみたらしげが、そのときにはもういつなかつたそうだ。」

「捜査官?..」

「どうした。」

「見張り中の捜査官は、あなたに連絡した後全員私の傍にいました。」

「

「じゃあ誰だ?..」

「おそらく、会場であなたが会った捜査官こそが侵入した組織のメンバーだったんだろう。そう考えると侵入したのはベルモットだろう。」

「取り逃がしたか。」

「ええ、もう遅いでしょう。」

「うしてベルモットの任務は無事に終了した。」

—翌朝午前七時。工藤邸—

「よひ、昨日はよく眠れたか?」

「寝れる訳ないでしょ。彼らが来るとわかつていて。」

「そんだけ言えるなら心配ないな。」

「まあ、せいぜいがんばるのね。」

(こいつほんとかわいくねー)

「おお、二人とも早いな。」

「赤井さん、ジャック。」

「実は君たちに言わなきゃならんことがあるんだ。」

「言わないといけないこと?」

「深夜にベルモットが一人でホテルに潜入した。」

「ベルモットが一人で潜入?」

「ああ、間違いないだろ?」

「でも何でわざわざそんな時間に? その人なら普通昼間などの人があまり時間に来るのに。何かあるわね。」

「何かつて何だよ?」

「さあ、ジンと任務で一緒になつたこともないからわからないわ。」

「とにかく奴らは昨日の情報以外の作戦も立てている。氣をしめて行こう。」

「ああ、ところでジャック？例の場所に仕掛けて来たか？」

「取り付けた。後はそいつからの情報次第だ。」

「よしでは幸運を。」

「俺たちに任せとおけ。」

「ああ、頼んだぜ。」

「CUTU-typeBです。私たちが警護を担当します。」

そうして、コナンたちは鈴木邸に、ジャック、赤井両名はそれぞれの配置へ向かった。

その後コナンたちは園子の家でパーティで着る服を決め、蘭と園子の四人でホテルへ向かっていた。

「その頃ー

「来たな。ベルモットはすでに作戦に入っている。」

「ねえ、ジン。はやく行こう。」

「そうだな。キャンティ、コルン、この前のよつなことは許されな

いからな。」

「ああ、わかつているよ。」

「では行くぞ。」

「わあー、コナン君、哀ちゃん、素敵よ。」

「まあこの鈴木園子様にかかれば・・・」

「うんありがと。園子姉ちゃん。」

そうじつて上機嫌に園子は控室を後にした。

「ねえ、蘭姉ちゃんは行かなくていいの?」

「平気よ。園子これから、リッチなイケメン男をゲットするんだー
つて張り切っていたからね。」

(おこおこあこつこ見つかつたらびりあるつもりだ?)

「今日せいこ思こ出こじょりうね。コナン君、哀ちゃん。」

「そうだね。」

- 13時 -

いよいよパーティが始まった。和やかなムードで時間はどんどん流れていく。

しばらくして一人の女が地下に向かっていた。清掃員にふんした彼女は地下の空調室に入つていった。そして鞄の中のものを換気ファ

ンの前に置くと、起爆装置をセットした。その時、

「動くな……」

第八話（後書き）

結構省略してすみません。

第九話（前書き）

直接対決、第一話目。じつせき 読んでください。

「動くな。」

低い声がした。聞き覚えのある声だった。

「あら、生きていたのね。ライ。いや赤井秀一さん。」

「久しぶりだな。キール。」

女は男の方に顔をむけて言った。

「キールより、水無怜奈の方がいいんじゃない。それも偽名だし。」

「やつだな、では水無さんと言わせてもらひまへ。」

「それにしてもよくわかったわね。組織の日本支部の最終兵器であることが。」

「「Aからの情報だ。」

「ああ、ヒートの本部の。でもなんでわざわざそこから。」

「あつむのことをとてもなく優秀でね。もうあの方の近くにいる。」

「だから、日本支部にそこを潜りせなかつたのね。」

「ああそつだ。」ひかりにひがじめとあの男が氣づくのは時間の

問題。だから向こうの幹部を落したんだ。やつすれば向こうの拠点を攻撃するときにも役立つからな。」

「で、なんでここまで私を泳がせたの?これをやらなきゃ私は殺されてしまうわ。やつすれば CIA の任務を妨害したことになるわよ。」

「あなたはもう CIA じゃない。あなたの今の所属は C - T - C - t y p e B - 日本支部だ。よつてあなたは私の部下だ。」

「やつわかったわ。で、これから私は何をすればいいの?」

「とりあえず、その毒ガスと、解毒剤を同時に噴射しひ。そして我々の管理下に置かれ拷問され解毒剤のことを話したが、隙をみて逃げたジンに報告しる。そのあとは奴らの情報を日本支部に送つてくれ。あなたは俺たちにとって重要な存在なんだからな。」

「そう、わかったわ。じゃあこの辺に刺し傷でもつけてくれない。ジンに疑われたらまずいでしょ?」

「ではやうしよう。私はまだやることがあるんでね。」

「じゃあ。」

赤井は部屋を出てジャックに連絡した。

「いらっしゃる赤井。作戦ビデオガスを確保した。そちらも一つ潰してく
れ。」

「了解。」

ジャックは向かいにあるビルへ向かつた。

— C T U 本部 —

分析官の電話が鳴った。そこのテスクの女は受話器を握った。

「 じゅう、 オブライエン。 」

「 クロエ、 僕だ。 」

「 ジャック。 」

「 今から建物に踏み込む。 映像を送つてくれ。 」

「 了解、 回線はそのままで。 」

「 わかった。 」

「 ・・・出ました。 A の建物の屋上に人影が。 ゴルフバッグが二つ
あつて、 そのそばに男女一組ずついます。 それ以外異常ありません。 」

「 」

「 了解。 」

するとジャックは息をひそめ屋上に向かつた。

屋上に出るドアの前にいたジャックはドアの陰に隠れて。 持つて
いた拳銃に消音器つけ弾を込めた。
するとジャックはドア越しから一人に近づいた。

「銃を捨てる……」

「何でこんなところに奴がいるんだい。」

「わからない、俺ら、ピンチ。」

そう言つと一人は両手を挙げた。

「……………」

「わかつてゐよ。」

「ジャックだ。一人を確保した。」

「了解。ほかの捜査官が行く。それまで見張つていてください。」

「ああ。」

数分後、二人の捜査官が到着した。ここで彼らにジャックが耳打ちをした。

「……………」

「わかりました。」

「頼んだぞ。」

そういうとジャックはこの場を後にした。捜査官は排水管のパイプのところまで一人を連れ、手錠をつけた。

「「」れでよし。」

「じゃあ、配置に戻るか。」

「そうだな。」

捜査官はドアを開けた。

「くそ、このままじゃまずいよ。コルン。」

「わかつてゐる。でも、俺、何も、できない。」

すると再びドアが開いた。

「あらあら、随分無様な姿じゃない。キャンティ、コルン。」

「フン、あんたに助けられるのかい。アタイたちは。」

「ああ。でも、それ以外、手、ない。」

「じゃあはじめましょうか。」

—パーティー会場—

「大丈夫かしら。もう一時半よ。もう第一次攻撃が始まつてゐる頃よ。」

「何もないことは大丈夫なんだろう。」

「でも、彼らが内部のこととを知る手もなしに作戦を実行するとは考
えられないわ。」

「ああ、それにジンのことだ。まだ何か仕掛けてくるだろ？ な。ましてや赤井さんやジャックが目を光らせていることを知つていたらなおさらな。」

「何かつて？」

「さあ、それはわからない。『A』にもそれ情報については何も入ってないってジャックも言つていたからな。」

「あー、また『ナン君と哀ちゃん、一人でヒソヒソ話してゐる。』

「最後の最後までそれですか。」

「そんなに大事なことかよ。」

（バーロ、俺たちの命にかかることだよ。）

「ねえ蘭お姉さん。『ナン君と哀ちゃん、また一人で内緒話してたんだよ。』

「そつか。『ナン君、そんなに哀ちゃんと一緒にいたいの？』

「もしかして転校する理由つてそれじゃない？』

「バ、バーロそんなわけねーだろ？』

「そつやな、いくら女の子とお手てつなぎながら一緒にアメリカに行くつて言つたつて、そんな訳あらへんやろ。な、コ、コ、コナン君？』

「ああ、一言余計だがな。」

「それよつこのホテルのスタッフおかしこと思わんか？」

「どうしてだ。」

「…………。」

「ああ、そんなことか。」

「工藤。お前その理由知ってるんか？」

「知ってるぜ。ただこのことは後でな。余計な心配すんなよ。」

「おじ工藤、チヨイ待たんかい。」

「それは、あんたのまひやー。」

「何や、和葉一体何やねん。」

「あつち見てみ。」

「ジイ——————」

「服部さん、なんであなたまでコナン君といっしゃしてたんですか？」

「いやあ、それは……。」

「悩み事があること余計黒くなるつて母ちゃん言つてただ。」

「おこおこ、ホンマにコマイシら小学生かいな？」

そんな感じで時間は流れて行つた。

「その頃一

「じつや失敗したよつね、ジン。」

「ベルモット、例のブツを使え。」

「ア解。」

第九話（後書き）

長くなつてすいません

第十話（前書き）

これでこの対決は終りしたいと思います。この後はパーティー後
の一人を書こうと思います。

「バー・ボン、俺だ。」

「何だ、ジン。」

「今すぐエーティーへ行け。ベルモットと交代で中を探れ。」

「了解。」

「兄貴、本当にやつしまつんですかい？」

「ああ、ガスの失敗は考えていたが、キャンティとコルンが簡単に見つかる場所を選ぶとは考えられない。つまり、あらかじめあの場所は張られていたということだ。そしてこの情報を流したのは奴だ。つまり奴らの罠にはまつたんだよ。それに俺は裏切り者は許さないタチだしな。」

「まあ、殺されて当然というわけですかい。」

「ホテル内」

ベルモットは地下で機械の設定を行っていた。そこにバー・ボンがやつてきた。

「早かったわね。」

「この近くにいたんですね。」

「じゃあ私はこれで、制服はあつちにあるから。」

ベルモットは部屋を出て行った。

「さて、じゃあ始めるか。」

「ジン、これから潜入する。」

「了解。」

そう言ってバー・ボンは持ち場へと向かっていった。

「その頃――

「いやあ、あの女もたまには役に立つね。」

「でも、俺、あいつ、嫌い。」

「ああ、本當ならここに来た時点で殺してるとこがいい。奴がノゾ支部の幹部何かにならなきやな。」

「とりあえず、俺、早く、撃ちたい。」

「ああ、そりそろだな。」

――再びホテル内――

「ねえ、工藤君。」

「どうした、灰原。」

「何か聞こえない？テーブルの下から聞こえるわ。」

「どれどれ、これは…………」

「佐藤刑事…………」

「どうしたの、コナン君。」

「これを見て。」

コナンはテーブルの下を指刺した。

「これって、爆弾…………？」

「ああ、間違いない。しかも爆弾の数は約五十個。残り時間は十五分。とても探してゐる余裕はない。ホテルの客を避難させて…………？」

「どうしたの？コナン君？」

「やうがそだつたのか…………」

するとコナンは携帯を取り出し、電話をかけた。

「もしもし、赤井さん？」

「どうした、ばーや。」

「ホテル内の爆弾が後十五分足らずで爆発する。」

「早く避難を・・・！？なるほど。ジャックに連絡する。ジャックから連絡をするまで君たちはそれまでホテルを出るな。」

「わかった。」

「どうなってるの、工藤君？」

「奴らはこの爆弾騒ぎで非常口から出てきた俺たちを狙撃するつもりだ。」

「なるほど。」

「だから、俺たちが出る前にジャックに奴らの作戦を壊してもいいのさ。」

「どうやって？」

「まあ見てる。」

一残り十三分一

「俺だ。」

「ジャック、赤井です。」

「どうした。」

「奴らの狙いがわかりました。奴らは我々を非常口で狙撃するつもりです。急いで確保してください。」

「了解。クロHにつないでくれ。」

・・・

「いやら、オブライエン。」

「クロエ、俺だ。Bの建物にあの一人はいるか?」

「映像を出します。」

「急いでくれ!」

「出ました。Aにいたのと同じ人物です。」

「了解。」

「ホテル内」

「みなさん、時間はまだあるので落ち着いて避難してください。」

日暮警部などの警察関係者が誘導している間、バー・ボンは確認作業をしていた。

「ジン、三十個までは正常だ。」

「よしそのまま続ける。」

「了解。」

「屋上」

「なかなか出てこないね。」

「おれ、早く、撃ちたい。」

「コルン、今撃つたらアタイたちのことがバレて逃げられるよ。」

「わかった。俺、待つ」

すると背後から放たれた銃弾がキヤンティ、コルン、両者の足を貫いた。

「銃を捨てろ！！」

「ち、またあいつか。」

「俺、逃げる。」

「アタイもな。」

そう言って一人は屋上から飛び降り、背負っていたジェットパックを使い無事に着地し逃走した。

「ホテル内」

「もしもしジャック？」

「俺だ。あの二人は排除した。もう大丈夫だ。」

「わかった。ありがとうジャック。」

「灰原、後どれくらいだ！？」

「残り一分三十秒よ。」

「よじギリギリ間に合つ。行くぞ！！！」

そう詰うと「ナンは灰原の手を取り、階段を駆け降りた。

「よし出口だ。突っ込め————！」

「パリン！！」

ガラスの割れる音がした。すると、

「アーネスト・トマス」

すさまじい音を立てホテルは爆発した。

「はあ、はあ、はあ、

コナンが荒い息を立ていた。

大丈夫か?」

「 シャツケ！ ああ 平気だよ 」

「 そうか、でもよくわかつたな。奴らの爆弾がおとりだと。」

「奴らは一番確実な方法を使う。全員の位置を特定できない状態で爆発しても全員消せる可能性は限りなく低い。だからわかつたんだ。奴らの目的は爆弾を爆発させることじゃなく、みんなを避難させることだつて。」

「なるほど、さすがだな。」

すると後ろから声がした。

「コナン君。この人は。」

「この人が僕の両親の代理、C.T.H.捜査官のジャック・バウアーさんだよ。蘭姉ちゃん。」

そしてジャックはコナンの仲間全員と握手をした。

第十話（後書き）

最後の音の表現が雑ですみません。

第十一話

「それでもコナン君の両親の代理つてジャックだつたなんて。

」

「ここの子の両親とはもう十年来の付き合いですね。それにちょうど本に行く用事があつたから迎えに来たんだ。」

「といひでよ、ここのおっさん何者なんだ?」

「ええーー!元太君知らないの!?」

「彼は、アメリカテロ対策ユニットに所属する、スーパー捜査官ですよ。彼がいたから、パーマーさんは今までやつてこれたといつても過言ではないでしょ?」

「いや、大統領は本当に優秀なお方だ。だから私は彼に忠実だし彼に協力する。」

「おー一人はすごい信頼関係なんですね。」

「おー、そう言えば、コナンと灰原は?」

「彼らは赤井さんに連れられて手当を受けているといひだ。もつもろそりこちらに来るだろ?」

「ここで、ジャックの携帯が鳴つた。

「バウアー。」

「ジャック、ミシユルです。」

「何だ。」

「ホテル爆破に使われたのは北朝鮮製の爆弾と判明しました。」

「責任はあっちに押しつける気が。」

「大統領は報復すると言っていますが、どうしましょう?」

「大統領につないでくれ。」

「了解。」

「ジャック、どうぞ。」

「大統領、私です。」

「ジャック、無事かね。」

「ええ、それより今すぐ現地に報告し、情報提供に協力するように説得してください。報復はそれの脅しで十分です。」

「うむ、私も同感だ。しかしジャック、閣僚たちは早急な対応を求めている。」

「ならばその閣僚を私が説得します。」

「一人頼みたい人物がいる。」

「それは・・・。」

「ジョイムズ・ヘラー 国防長官だ。」

「わかりました。」

「ではつなげぞ。」

「お任せください。」

「その頃ー

「あなたと手をつないで逃げるとあは、いつもガラスから飛び出るわね。」

「しゃーねーだろ。あれが一番早かつたんだからよ。」

「まあ、いいわ。ちゃんと守つてくれたしね。」

「バーコ、まだ始まつたばかりだ。先はまだ長いぜ。」

「これから何回お世話になるのかしら?」藤君。

「何回でもいい。それが俺の役目だからな。」

「あつ。」

「ん、どうした? オメー顔赤いぞ。」

「別に赤くなつてなんかないわよ。」

「やうか。」

「あなたこそ少し赤くなつてゐるじゃない。まさか・・・。」

「バーロ、女の子にそんな真剣な目で見つめられたら・・・。」

「田つ毛の悪い子でもっ。」

「こやれつ毛のお前の田は志する女の子の田だつたぜ。」

「バカ。」

「わあてそろそろ正体を暴けりばじやねえか。ここののな。」

そう言つと、田の前の人物を指差した。

「何でこんなといひにいるんだ、コソ泥さん。」

「そう言つ西川君、彼女に何見とれてるんだ?」

「上うちの質問が先だ。」

「へえへえ、わかつたよ。実は俺もあの組織を追つていたんだ。それで今日ここに集まるつて情報を手に入れて、こつそりCTUに紛れ込んだつて訳だ。」

「なら、協力しねえか?俺たちはこれからアメリカに行く。だからオメーは・・・・。」

「了解。じゃあ今度はこつちの質問に答える番だ。」

「バ、バーロー！…んなこと言えるかよ。と、とにかくここの話はノーメントだ！」

「なら早くじつにするか決めておけよ。一兎を追つもの一兎も得ずつて言つしな。」

「放つておけ。」

「じゃあな名探偵。楽しんでこいよ婚前旅行。」

「つたく、好き勝手なこと言つやがつて。あれ、灰原？ビリついた。」

灰原の頬は真つ赤だつた。

(「、婚前旅行？工藤君が蘭さんとじやなくて、この私と…
工藤君…」)

「おい、オメー大丈夫か？」

「なんでもないわ。さあ、行きましょ。」

(「おいおい、一体何だつたんだ？まさか…」)

—再びホテル前—

「ですから、武力は外交には敵わないんですよ。」

「…………。わかつた。大統領の考えを飲もつ。」

「ありがとうござります。」

「ただし、条件がある。」

「条件?」

「何、大したことじゃない。CTIをクビになつたら私の元に来てくれないか?」

「わかりました。お引き受けします。それでは。」

ジャックは電話を切ると爆破されたホテルを見上げた。

（必ず、奴らを排除する。）

彼は誓つた。

第十一話（前書き）

昨日はネタ切れ感マックスの話ですみません。時間があれば訂正したいと思います。みなさんに長く読んでもらえるように頑張るのでも、よろしくお願ひします。

第十一話

「北朝鮮からの情報です。大統領。」

「どうだった。」

「はい、爆弾を盗んだとみられる兵は、先日の訓練で全員自殺しています。これでは関係者を当たる線も難しいと思います。」

「そうか。で、どうやって日本に入った?」

「ルートは不明ですが、政府内の関与者にいるかもしません。」

「なぜだ。」

「どんな裏ルートも足が残ります。しかしそれがないということは裏の裏、つまり正規ルートを使った
としか考えられません。そう考えると必要不可欠かと。」

「確かに。政権内に裏切り者はいないだらうが、関与者はいそうだ。
よしシークレットサービスに見つけてもらおう。」

「了解しました。我々は引き続きアジトの捜索を行います。」

「ああ、頼む。」

「では、失礼します。大統領。」

「任せたぞ。ミスター・パー・マー。」

大統領は受話器を置き、アーロンを呼んだ。

「何でしうつ？大統領。」

「政権に爆弾輸送にかかわったとみられる人物にがいるかもしだい。貨物の無チェック用の書類を全力で当たつてくれ。」

「わかりました。」

「とくにあの国に近い国は徹底的に調べる。」

「了解。」

大統領執務室からアーロンがでた。大統領は危機の余韻の休息に入つた。

-阿笠邸-

パーティーのあとコナンは一度阿笠邸に寄ることになつた。

「しかし、危なかつたのう。」

「ああ、」Aからの情報も80%は完璧だつたんだけど。」

「じゃあ、君たちは待ち伏せしていたといふことか。」

「ええ、そうよ。」

「なら、どうして教えてくれなかつたんじや？」

「ワリーな、博士。でもこれは危険な作戦だ。簡単に言つわけにはいかなかたんだ。」

「それにしてもCTIは彼らの手がわかつたのう。」

「わかつて当然よ。」

「どうしてじや?」

「本部にはボスの右腕といわれるNOJIがいるんだ。」

「なるほど、ジンたちの情報はその人によつて筒抜けじやつたといふ訳か。」

「それに今回の爆発にはもう一つの目的があつたんだ。」

「もう一つの目的?」

「裏切り者の始末だよ。」

「う、裏切り者じやと。」

「ああ、バー・ボンが俺たちに利用されて情報を流したことがジンにバレたんだ。それでジンはCTIに紛れ込ませ爆弾の確認と偽つて奴をホテルの中に閉じ込めた。」

「そうじやつたのか。それにしても本部のNOJIはすうじのう。」

「ああ、赤井さんが潜入した時はジンどまりだつたからな。」

「赤井さんって、あの人組織の一員だったの？」

「知りたいが、眞実を。オマーが一番つらいことだぞ。」

「ええ、いいわ。」

「赤井さんは明美さんと諸星大という偽名で接触し組織潜入した。」

「ちょっと待つて。それって・・・。その人のコードネームって、まさか。」

「ライだ。」

「！？」

「そり、彼が組織に入るのに利用したのはオマーだ。」

「何じやと。」

「ああ、だからオマーは昂さん警戒したんだろう。もと組織の一員だつた赤井さんが化けていたんだから。」

「そう、だつたの。」

「実は赤井さんは、赤井さんは・・・」

「まだ何かあるの？」

「赤井さんは、明美さんの恋人だつたんだ。」

「……？」

「それで……。」

「何？」

「いや、この先はあの人にはしか言えない。俺も真実を知ったオメーを慰める側だからな。」

「もう。」

「……。」

灰原の瞳にじわり、じわりと、涙がたまつていく。今にも溢れそうな瞳の彼女をコナンはやさしく後ろから抱き締めた。心の叫びともされる泣き声を出しながら、コナンの胸をつかみ泣いた。それはくしくも3年前と同じ状態だった。コナンはそんな彼女の背中に手を当て、自分の方に彼女の体を寄せた。

「「あんな、こんなことになることなんてわかつていたのに。」

「んずつ、いいの、いつかは知るんずつ、ことだから。……んずつ。それにあなたがんずつ、いれば。」

コナンはすつとやさしく抱きしめ続けた。彼女の心を深く染めていれる冷たい悲しみ。その悲しみさえもその温もりで温めているかのように。

「工藤君。……私。……私。」

「いいんだ。思いつきり泣け。俺が全部受け止める。」

「それは蘭さんのための言葉でしょう？」

「バーロ、少しあは素直に受け止めるよ。」

「……んづつ、バカ。」

夜はさうに受けしていく。

第十話（後書き）

哀ちゃん、キャラ崩壊しました。すいません。

「工藤君、もう大丈夫よ。ありがと。」

「わりーな。」

「あなたが言つてくれてよかつたわ。」

「せうか。それより明日のことはわかつてゐるよな。」

「ええ、明後日早いから明日はもう少し泊まるんでしょ。」

「だけど密が来る。」

「密つて。」

「それは明日のお楽しみ。じゃあ博士さんを帰るな。」

「気をつけろんじやぞ。」

「ああ。じゃあな。」

「ナンは阿笠邸をでて、夜の米花町に消えていった。」

(工藤君・・・・)

灰原の体は「ナンの温もりで十分に温められていた。

「顔が赤いのう、哀君。」

その赤せきハナンの温もりに温められたからか。それとも・・・

「博士、何言つてゐるの――もつと寝るわ――！お休みなさい――。」

(ムキになりおつて。しかし新一はどちらを選ぶのじゃねー。)

博士は考えていた。最近のコナンの行動は、誰を一番に考えているのだろう?「ナンの目はだれを見ているのだろう?」

（どうしたんだろ？ 俺は。）

無理もない。小さくなつてからも新一は蘭を思つてきた。しかし、コナンの心は灰原を見つめている。自分はどうちに正直になればいいのか。工藤新一として生きるべきなのか。それともこのまま江戸川コナンとして生きるべきなのか。夜の街がコナンの心を見どうしたような静けさに包まれている。その中は自分の足音しか聞こえない。そこで一人の人物に会つた。

「 もひ、 ナン君！ 博士の家で何やつてたのーー心配したじやない
ーー 」

聞きた声。蘭だ。

「ごめん、蘭姉ちゃん。」

「わあ、早く帰らつ。」

「うん。」

思えば二年前。ジンに例の薬を飲まされ行くあてのなかつた自分の面倒を見ててくれた蘭。そこから「江戸川コナン」の生活が始まった。つっここの間までつないでいた手は両足の脇にある。肌寒い夜に真冬のような空気が漂っていた。

「蘭姉ちゃん、今までありがとうございました。」

「どういたしまして。コナン君がいてくれて私どつても楽しかったよ。」

「僕もだよ。」

（そうだ、みんなの平和な生活を俺が壊してはならない。絶対に組織を潰す。）

「コナンは静かにその闘志に火をつけた。」

「じゃあ僕寝るね。」

探偵事務所に戻ったコナンが言った。

「待つて、コナン君。」

「なに? 蘭姉ちゃん。」

「一緒に寝ない?」

「えつ?」

大学生になつて大人ぽっさが出てきた蘭。その目はいつもと変わらないまつすぐな目だつた。

「…………いいの？」

「うん、お父さんには私から説明する。」

「じゃあ、布団持つていくね。」

「うん。私もうちょっとやらないといけないことがあるから、先寝てて。」

「わかった、お先に、蘭姉ちゃん。」

「ナン蘭の寝室に自分の布団を引くと、その中で静かに目を閉じた。

第十四話（前書き）

昨日は学校が早く終わったので、ネタ探し旅に出でいました。更新できずすみません。

朝。 パナンは田を覚ました。 しかし、 背中が妙にあつたかい。

「ええ……、 な、 何じやうじやー?」

パナンは驚きの叫聲を漏らした。 パナンの全身を蘭の体で覆われてこるのでかい。

(おこねこ、 んなといおひかせんに見られたら……。 賴むおひか
ん。 来るんじやねーだ。)

しかしその願にもむなしく……。

「パナ——何でお前が蘭のといひで寝てこらねんだ……。」

その声に寝息を立てていた蘭も田を覚ました。

「お父さん、 お母さん。 」

「おなよひじやあね・え……蘭……。」

「おへ、 パナン君は悪くなこのよ。 私が誘ったんだかい。 」

「蘭、 かばわなくてこいだ。 今からこいつを……。 」

「ほんとよ。 今大学に行つていこう的な男性に会つてゐたが、 三井の悲しみを慰めてくれたのはほかでもなこ、 パナン君よ。 時には命をかけて私を守ってくれた。 新一と同じよひ。 」

「・・・・・」

「何も言えないでしょ、お父さん。私はずっと新一を待っていた。会つてもアイツはすぐに事件だつて言つて私から離れて行った。そんな時はみんなが慰めてくれてた。でも、新一を待つてること応援してくれたのは・・・、三年間私を支えたのはこの子だった。」

「そうだったな。」ナン、今まで蘭をありがとな。」

「おっしゃん。」

「それから悪いな、蘭。もうお前を寂しくなんかさせないからな。」

「それって・・・。」

「今晚出かける。」

「お父さんーーー。」

「さあ、起きて朝飯作ってくれねーか。」

「うん、ちょっと待つて。」

最後の朝に素直になつた毛利の人々。その未来は輝くだろうか。

「じゃあ、いくね。」

「氣をつけるよ。」

「空港でね。」

ポアロの隣にある一階の探偵事務所に上がるための階段の下。スリケースを転がして歩く少年に声をかける一人の親子。

「バイバイ。」

三人ともその背中は寂しげなオーラを出していた。

コナンの耳にはスリケースのローラーとアスファルトの接する音しか耳には入らない。その静けさの中、コナンは阿笠邸に向かった。

「よし。」

「ねつ、新一。」

「どうしたんだ。目の下がクマだらけだぜ。」

「やつと完成したんじや。」

「完成?」

「感謝しなさい、博士に。あなたのメカの改良のために一週間ほどんど寝てないんだから。」

「新一のものだけじゃないぞ。哀君にも作ってある。」

「わ、私のために。」

「ただし、クイズに答えられたらじや。」

「おこなこ。」

「まあ。 しょうがなにわね。」

「では、問題じや。江戸時代、もつともこまこました職業をしていったのは土農工商の四つの任せじや?」

「結構難しいわね。」

「博士、 じとなの作るへりこなりせかのとじゆに脳みを回せよな。」

「 もしかして、 わからんのか?」

「バーロ。今考へるよ。」

果たして「ナシ」は正解であるのか。

第十四話（後書き）

このクイズ、もちろんダジャレです。

第十五話（前書き）

みなさん、クイズは解けましたか？少々強引かも知れませんがご了承ください。

第十五話

「答えは、商人だろ。」

「ぎく……なぜわかつた？」

「いきいきしている仕事つてのを、飽きない仕事に変換するんだろ。それで飽きない仕事は商い仕事になつて答えは商人つて訳だ。」

「正解じゃ。さすが新一。」

「なあ、灰原。『一ヒー入れてくれねーか。寒くてよ。』

「同感よ。待つてて。」

「さて新一。説明するが。一つ田はーこつじや。」

「これ蝶ネクタイ型変声機じゃねーか。」

「裏をよく見てみろー。」

「あれ、裏にスイッチが増えてるぞ。」

「そうじゃ。そのスイッチを押すと君が言つた日本語が英語になるんじや。」

「へえ、博士にしてはやるじゃん。」

「もうじやね。続いて次は『こつじや。』

「今度は追跡眼鏡か。」

「ああ、まず追跡機能の方じゃが、この発信機は半径五十メートルまでの位置がわかるようになった。さうに一つ機能を追加した。それはこいつとのコンビで動く。」

「イヤリング型携帯電話。こいつと？」

「そう、こいつにはコードが使っている端末機能が付いた。」

「端末機能？」

「ああ、まずこじについてるこのケーブルをここに接続させる。そしてアクセスコードを入力する。するとレンズの片側に送られてきた情報や画像を確認できるんじゃ。」

「す、すげー。博士、頭大丈夫か？」

「わしは大丈夫じゃ。さて次に行くぞ。お次はこいつじゃ。」

「腕時計型麻酔銃か。」

「こじつは今まで一日一発だったのが三発になつたぞい。」

「これでこいつの弱点も解決だな。」

「そりじゃのひ、お次はこいつじゃ。」

「どこでもボール射出ベルトか。」

「ああ、こいつも大幅にパワーアップしたぞい。まずはロックオン機能じゃ。これはボールが向かっている方向で一番近い人間を感知して、そやつに向かっていく。一つ目はボールが膨らむ前の状態が小さくなつて、中に入れられる数が三つに増えたぞい。さらにボールの持続時間が一分に伸びたぞい。」

「おお、やっぱ今日の博士は違うぜ。」

「せうじゅる、お次はこいつじゃ。」

「ターボエンジン付きスケボーか。」

「そうじゃ。こつはソーラーパワーのほかにバッテリーを搭載した。これで夜でも一時間走れるぞい。」

「すげーな、博士！まだあるのか。」

「もちろん、今度は新発明じゃ。」

「ど、吉つと？」

「こいつじゃ。なすけて、ブレザー型ピリピリチョッキじゃ。」

「ピリピリチョッキ？」

「そうじゃ、こつは一センチ前からピストルで撃たれてもなんら問題のない防御力と、これに触った人を瞬時に感電させて気絶させる攻撃力を備えてるんじゃ。」

「何つてこ'うか、マジで博士が作ったのか？」

「もちろん。ホレ、哀君にもあるぞい。哀君のは白衣型と、上着型の一種類じゃ。」

「あら、珍しいわね。」

「まだあるのか？」

「これが最後じゃ。ペン型。シキングセッティング。こいつを使えばどんなドアも五秒で開けられる。むらにこのペンの先は監視カメラになつていて、端末と同じよつて確認できる。」

「博士、これ大量に作れば金持ちだぜ。」

「やつじや。やっぱりわしは天才なんじゃ。かーかつかかか。」

(中身はかわつてねーな)

かくして阿笠博士の新作発表会は終りを告げた。

「ピーンポーン。」

阿笠邸のインターホーンが鳴つた。

「おひ、アソツにしてはタイミングがいいな。」

おおせの畠にカンかさいた密が来たらし

۱۱۹

何せかぐ来てせうたむるにその態度はなしせんけ

しかし乍ら新一は用語表を眺めながら、

ハーティーの時聞かれたことを話すためだ。

「聞かれたこと？」

「ああ、どうしてホテルの従業員がみんな片耳にイヤホンを入れてたかつてことさ。」

「そんでもう少し話していい事情やと思ったから」「何で来たんや。」

「なるほど。確かにそれは言いにくいわね。」

「ほ、ほんなら、姉ちゃんも・・・」

「ええ、知つていたわ。私たちが狙われていたんだから。」

「ね、狙われとつたやどーまさか工藤、まさかお前、危険になることを承知でのパーティーやつとたんとけつやうな。」

「その通りだ。あれは俺とCTJが組んだ作戦だ。」

「せ、作戦やどー何で俺にも話してくれへんかったんや?..」

「わりーな、服部。オマーを巻き込むたくなくて。」

「アホ、あのパーティー来とつたら十分巻き込まれてるわ。」

「そ、うだな。でも」Aからの情報がなければ、こんな作戦はできなかつたからな。」

「何で、情報が」Aから来るんや?..」

「そこに組織のボスがいる。」

「な。何やで。」

「そして、俺たちはそのボスの側近のNOJCからの情報を得て作戦を立てた。その結果犠牲者が出なくて済んだんだ。」

「こことは組織はあの爆発以外にも何か仕掛けておつたちゅうわけか。」

「ああ、毒ガスをな。」

「ど、毒ガスやで。」

「日本支部最大の武器の毒ガスで、吸えば一分で即死だ。」

「そんなもんまで使つてきたんか。」

「でも、それが不発に終わった今、奴らも日本では行動できないはず。奴らは日本にＺＯＣがいると見てこらるらしくからな。武器がない自分たちが作戦を起ししても、ＺＯＣにまくらされＣＴＵにお縄にされちまうからな。」

「さうか。で、一人はアメリカでビーフするんや?」

「一応ロスの学校に転校することになつてるけど、学校が始まるのは九月から。それまでは向こうの家でゆつくりしてるや。」

「どうだか?」

「何だよ、オメー。」

「だつて、あなたと一緒にゆつくりできたことなんて一度もないわ。」

「ホンマ、じつ事件を呼びおるからな。」

「まつとけ。」

「とにかく必ず生きて帰つてこいや。この前行き損ねてもうたうま

い好み焼屋連れて行つたるさかい。姉ちゃんも来るかいな？

「こつはいよ。あの時何も食べられなかつたのは俺だけだから。

「

「じゃあ、私も御馳走にならうかしさ。この人とは別のとき。

「一緒に来た方がええと思うんやけどなあ？」

「とにかく、この話は生きて帰つてきたらな。」

「おひ。ほな、氣つけえや。」

服部は阿笠邸を後にした。

第十七話（前書き）

御無沙汰してます。久しぶりに投稿します。

第十七話

服部を見送った後の阿笠邸は沈黙していた。灰原が氣を使って入られた「一ヒーを飲みながら「ナンが口を開いた。

「今までありがとうございました、博士。」

「どうしたんじゃ、新一。」

「私からも言つわ。ありがとうございました、博士。」

「博士は正体をバラさずどんな無茶にも協力してくれた。それにメカもたくさん作ってくれた。博士がいたから今があると思ってるぜ。ほんとにありがとうございました。」

「ああ、アメリカでも頑張るんじゃぞ。」

「ところで博士はどうするの?」の家に一人は広すぎるんじゃない?」

「大丈夫じゃ。」

「何でだよ?」

「夜になればわかるぞい。」

二人は頭の中に疑問を抱えた。次第に日が暮れ灰原が夕食の準備を始める。コナンは推理小説に読みふけつており、時の移りなど気にも留めなかつた。博士は用事だと黙つて出かけている。

「工藤君、準備手伝ってくれないかしら？」

「・・・」

「あなた聞いてるのー?」

「・・・」

「しょうがないわね。」

そう言つて灰原はキッチンを後にして「コナンがいるソファに向かつた。目の前に立つてもまだ気がつかないコナンの本を取り上げた。
「もつ、さつきから何回呼んだと思ってるの?」

「わ一一。で、何かようか?」

「夕食の準備を手伝つてって言つたのよ。」

「わあつた。」

コナンは重い腰を上げた。ちょうど博士も歸つて來たので夕食となつた。

「で、博士はこれからどうすんだ?」

「この人と一緒に住むつと思つんじゃが。」

そう言つて指差した先には、博士の初恋の人でありフサフランド
オーナーの木之下フサエの姿があつた。

「久しぶりですね。」

「」んばんわ、フサヒさん。」

それからフサヒさんを含めた四人は和やかなムードに包まれた。た
だ灰原が博士の健康を考えた食事を作つてと頼んだ時の博士の顔は
辛そうだった。コナンは博士の冷やかした。

「じゃあ、明日は早いから、俺と灰原は寝つかう。」

「お休み、博士、フサヒさん。」

コナンは一階の客間に、灰原は寝室へと向かった。

—翌朝—

コナンたちは七時半の便でロサンゼルスへと向かう。一人はビート
ルに荷物を載せ、成田空港へと向かった。

「いよいよだな。」

成田空港に着き搭乗ゲートに向かうコナンがつぶやいた。

「ええ。」

灰原もつぶやいた。小学生とは思えない強い目した少年と少女を、
空港にいた人々に見ている。搭乗口にさしかかった時、聞きなれた
声がした。

「みんな。よく来てくれたな。」

「蘭さんが昨日博士に聞いて、みんなで来たんだよ。」

「向こうに行つても頑張つてくださいね。」

「うまいうな重の店あつたら教えりよ。」

少年探偵団の仲間達。

「氣イつけりや。」

「また大阪きてーな。」

服部と和葉達から。

「コナン、両親の言つことをちゃんと聞くんだぞ。」

「じゃあね、コナン君。また会おう。」

小五郎と蘭からの暖かい言葉を受けながら、来てくれた人全員に手を振つた。そしてジャックが駆け付け、彼らの姿は搭乗口の中に消えていった。

「寂しくないか?」

「それは、寂しいわよ。だけどこれは私たちの問題。みんなに迷惑をかけられない。」

「ああ、必ずぶつ潰してやるぜ。」

「ナン、灰原、ジャックを乗せた飛行機はロサンゼルスに向けて空に駆け上がつた。

(第一部完)

第一部 第一話（前書き）

いよいよ「A編」に入ります。一応地名は実際のものを使いますが、住所などは架空のものを使うのでもよろしくお願いします。

雲の上を悠々と飛んでいる一機のジャンボジェット。その中にいる連邦捜査官一人と少年と少女。彼らは他人には言えない大きな使命があった。奴らを潰すという大きな使命。

「君たちと会うことは運命で決まっていたのかも知れないな。」

ジャックがつぶやく。

「そうだね。僕がこの体になつてコナンと名乗つてから新しい生活が始まった。組織を追つて命をも落としかけたこともあった。でも工藤新一を待つてゐる人、江戸川コナンを信じてくれる人のために俺はこの戦いで奴らを倒す。」

「長い戦いになるだろ。しかし彼らは必ず倒す。アメリカの国益、自由、安全を保つために。」

「僕たちは運命共同体だね。」

「君たちをこの戦いに巻き込んでしまつたことを・・・本当にすまないと想つ。」

「それはこっちのセリフだよ。」

「どうでもいいけど静かにしてくれないかしら?今いとこりなんだから。」

灰原が一人に水を差した。彼女は洋画を見ていた。切ない恋愛もの

だつた。

「わ一一な。」

コナンは謝罪した。その後はそれぞれの時間が流れて行つた。気がついたころには到着十分前だつた。

「そろそろ準備するか。」

コナンは身の回りを整理し始めた。雲の間を抜けると窓の外には、真つ暗な空間の下に、おびただしい数の明かりが輝いていた。

「到着は零時三十分だ。君たちは仲間が回してくれた車で工藤邸へ送る。」

ジャックが言つた。

「わかつたわ。」

灰原が答える。

大きな翼を広げた鉄の鳥がゆつくりと羽根を休めるために地上に降下していく。それは新たな戦いの始まりのゴングなのかもしれない。

「Aの地に降り立つた三人。到着ロビーに入ると一人の紳士と二人のキャリアウーマンらしき女が彼らを待つていた。

「ジャック。」

ストレートの髪の女がジャックに近づく。

「久しぶりだなクロエ、どんな風の吹きまわしだ?」

ジャックは三人に挨拶をすませると二人のことを説明し始めた。

「この二人が組織の被害者で、今回捜査協力してくれるシンイチ・クドウとシホ・ミヤノだ。」

「本当に見た目は小学生ね。」

驚いた表情をするクロエだが、ほかの二人は意外と冷静だ。ジャックは次に二人に説明を始めた。

「彼女はクロエ・オブライエン。レベル6の分析官で俺が信頼する仲間の一人だ。データ関係なら彼女が一番だろう。その隣の彼女はミシェル・デスラー。彼女はLA支部のチーフだ。そして残りの彼がビル・ブキヤナンだ。彼は現場部門のチーフで作戦の第一線で指揮を執る。」

「よろしく。」

「こちらこそ。」

笑顔で握手を交わす。その後LA支部のメンバーは職場へと戻つて行つた。ジャックたち一行は、ビバリー・ヒルズにある工藤邸に向かつた。

夜の街を駆け抜けけるグレーの車。フリー・ウェイはさすがにこの時間だとガラガラだ。あつという間にLAの街並みが車窓から離れていく。しばらくしてビバリー・ヒルズに入った。どちらを見ても豪邸

しかない。その豪邸の中に工藤邸の明かりが見えてきた。ジヤックが呼び鈴を鳴らすと、有希子が出てきた。

「新ちゃん、久しぶりね。それに哀ちゃんも。」

「たく、挨拶する暇があつたら荷物運ぶの手伝えよな。」

「あら、レディにそんなん」と言つた。

「手伝えば瘦せれるだ。」

「失礼ね、新ちゃん。」

その後も[冗談を言つながら]コナンは荷物を家の中に入れ始めた。

「さて、此づけは明日にして、もう寝よ。まづみつまづ。」

「そうね、日本出たのが早かつたせいか結構眠いわね。」

「じゃあ、そういうことで。」

二人は工藤夫妻が用意した部屋に向かい、夢の世界へと旅立つていった。

第一話

翌日、LIAは見事な青空が包みこんでいる。

「新ちゃん、早く起きなさい。」

有希子の声が響く。すると皿屋に「もつ」といた優作が

「有希子、もう少し静かしてくれないか？」
と言い、軽い言い争いが始まったが、コナンが出ていく気配はない。
有希子は仕方なしに灰原を呼び彼を起^さすことにした。

「しょうがないわね。」

灰原も不機嫌そうな顔をしながらコナンの部屋に向か^づ。

「工藤君、あなたいつまで寝るつもりなの?」

ドアを開けた灰原が頭^いなじ^こ一悶。ところがコナンの反応は鈍い。

「うせえな、もうちよつと寝させうよ。」

呆れた灰原は最終兵器を使つ^ことした。

「バカー・やめろー。」

コナンが驚いた。灰原が自分の腕をつかみ、胸にあてようとしているのだから。

「妙なことをしたら抹殺よ……￥￥￥」

灰原に抵抗できずついにコナンの手が灰原のボディに触れる。しかしその瞬間。

「痛つてえーーー！」

コナンの指に高電圧の電流が流れた。さすがのコナンの眠気も覚めたようだ。

「あら、新ちゃん。哀ちゃんにやられたのね。」

有希子が部屋に入つて来た。

「これが毎日続くと思つと気が重くなるわね。」

その後朝食を食べた二人は荷物の整理を始めた。

「えつと、『れは』つちで『れは』・・・」

コナンは次々と運んでいく。一方の哀は、もつ終わつておりパソコンのデータの確認を行つた。しばらくしてコナンの部屋片づけがひと段落した頃、ジャックがやつて来た。

「どうせ、片づけは終わつたよつだな。」

「ああ、お陰さまで。」

「ところで、今からドライブでもしないか？ 戦場を下見しないと行

けないからな。」「

「やつだな。じゃあ、お願ひしよう。」

コナンはジャックの車に乗った。その頃工藤邸では・・・

「あ、新ちゃんは?」

「やあ、ジャックが来て下見に行つたわ。」

「やあ。」

灰原と有希子はリビングのテーブルに向かい合つて座つていた。

「袁ちゃん、新ちゃんのことは思つてゐる?」

(何を言つ出すの?)の人。)

「私の勘だと袁ちゃんは新ちゃんのことになつてゐるでしょ?」

図星だつた。三年間自分の心の奥でひた隠しにしていた一番強い気持つ。それがコナンへの想いだった。

「気になつてゐる?」とやあつません。」

「やあ、でも袁ちゃんは蘭ちゃんのことを見つけてるのね。」

「はい、私のせいで彼の人生や彼女とのかけがえのない時間まで奪つてしまつた。こんな私を彼が受け入れてくれるわけがない。」

これが彼女の本心。たとえ彼が許しても自分の思いを伝えるべきではない。決して叶わぬ恋。それが自分への抑止力として働いていた。

「そう、でもつらいんじゃない？」

「いえ、これは私に与えられた使命。そして彼の幸せを願つものとしてやらねばならないこと。」

「そう。」

有希子が悲しそうな瞳をしながら彼女を見つめる。静かに時が流れていった。

「でも哀ちゃん。どうしてそんなに自分を苦しめるの？」

「それは私の運命。どうにもすることができないんです。」

「辛い思いを抱えていた灰原に有希子が語つた。

「確かにあなたは新一を小さくした薬を作った。そしてその薬のせいでかけがえのない命を奪つた。そのことは償わねばならないこと。でもだからと言って新一と一緒になつていちゃダメだとは思わないわ。それは、薬によつて人生が壊れてしまった人も望んではいない。あなたは悪いわけじゃないのよ。むしろ私は哀ちゃんに感謝しているのよ。」

「何で私なんかに？」

「まず薬を飲まされる羽目になつたのはあの子がでしゃばりすぎたから。でもあなたの薬があつたから彼らは拳銃を使わなかつた。この時点ではあなたは新一の命の恩人なのよ。そしてあなたは新一が元に戻るために毎晩のよつとパソコンをいじつっていた。私たちには感謝しかないのよ。」

「でも・・・」

「哀ちゃん。今すぐことは言わないけど、自分に素直になつてね。新一だって哀ちゃんのこと意識してるみたいだから。」

「わかりました。」これはしばらく秘密にしてください。」

「しばらべじやないかもよ。あの子相当鈍感だから。」

「そうですね。」

灰原はクスッと笑った。有希子はそんな灰原を見ながら思った。

(新ちゃんはどうあるのかしら?)

——一方その頃——

「で、ジャック。どこに行くつもりなの?」

「じーじだ。ちょっと彼女に渡したいものがあつてね。君をパーマー大統領に会わせたかったしな。」

「そうか。」

「ではクロエに頼んで電話会議をやせるよつに手配せせる。」

ジャックは携帯を取り出しクロエに電話をかけた。

「オブライエン。」

「クロエ、俺だ。」

「ジャック。」

「パーマー大統領と話がしたい。つないでくれ。」

「了解。・・・・・どうぞ。」

「ジャック。」

「大統領。今からお時間は大丈夫でしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「わかりました。今隣には協力者の工藤新一がいます。」

「彼が。」

「それで、CCTVに着いたら電話会談をしたいのですが。」

「いいだろう。後どれくらいで着く？」

「約十分です。」

「わかった。すぐに支度に入る。」

「了解しました。」

「CCTVで準備が進んでいる。ついでにメンバーも紹介しそう。」

「ありがとうございます。」

車は「Aの街を駆け抜けていく。ジャックの腕で周りの車を置いていく。

第二話（後書き）

しばらくペースが遅くなつたつです。LAの対決の内容はほとんど決まつてゐるのですが、その前の些細なことがなかなか思いつきません。あやふやになるかも知れませんがよろしくお願ひします。

「着いたぞ。」

車から降りた一人の少年と一人の男。

「ミシェル。」

「ジャック、こっちよ。」

そう言って彼女は彼らを会議室へと連れて行った。その会議室には大型画面があり、非常事態のときには大統領からの指示を直接受けることができるようになっていた。

「ここからはクロエの仕事よ。」

すると見たことのある女性がやつて來た。空港に来ていたCTUのクロエ・オブライエンだった。

「つなぎます。」

すると彼女はキーボードを異常な早さで打ち始めた。コナンは灰原がデータを見ていた時の動きを見てきたが、そんな彼であっても圧倒されるスピードと正確性だった。

「ジャック。」

画面がつながった。どうやらパー・マー元大統領はホワイトハウスにいるようだった。

「大統領。早速はじめましょう。」

「ナンが画面の正面の席に座った。

「はじめまして。シンイチ・クドウ。あなたのお父上の小説はいつも楽しく読ませてもらっているよ。」

「ハリウッド。ミスター・パー・マー。どうりであなたの隣の人は？」

「ああ、こいつは私の弟のウェイン・パー・マーだ。私の秘書をやっている。」

「よろしく。」

「ああ。」

その後「ナンは日本での戦いのときの話や、「ナンになつた頃の気持ちなどを話した。

「さすが私たちが一皿を置いているだけのことはあるな。」

今度はディビットが主導権を握つて話し始めた。

「さて、そろそろ組織の「A支部のことを話す時間のようだ。彼らのコードネームはスピリタス、ロレンコ、ノイリー、スーパス、ハイボールだ。このうちハイボールとロンリコは我々の仲間だ。」

「一人もNOCはいるんですかーーー?」

「ああ、彼らはもともと国防総省と CIA という別々の国家組織のメンバーだったが、今回 C T U t y p e - B がきて仲間となつたんだ。ハイボールは組織一の狙撃手といわれていて君が日本で戦つたキャンティ、コルンは彼の一一番弟子だ。ノイリーは最初研究施設に潜つたがある理由でスピリタスの手にとまり、一番の側近となつた。」

「じゃあ、ホテル事件の時の情報は彼から。」

「そうだ。そしてジャックや君たちがうまく行動してくれたおかげで、日本支部はしばらくは行動できないだろう。万が一に備えて赤井君もいるので安心してこっちで戦つてほしい。」

「ありがとう。」

その後は今後のことなどを話した。

「ティービット。そろそろ大統領とのお約束が。」

「わかった。ではまた会おう。」

「はい。」

そう言って約一時間に及んだ会談は終わつた。

「あなたなかなか肝が据わつているわね。」

「どうしたの? クローハさん?」

「彼とあんな風にしゃべるのはジャックぐらによ。」

「そりなんだ。でもそれべりこじやなきも今生きてこなこよ。」

「フッ。面白こわね。」

「シンイチ。例の物が手に入った。」

「そりか、じやあ帰ろうか。」

「待つて、あの子に伝えてね。待つてねつて。」

「あ。」

「ナンはじっこを後にじた。」

「哀ちゃん、ちょっといいかしら？」

有希子が哀を訪ねた。

「はい？」

「ちょっとみて、新ちゃんの部屋。」

灰原はコナンの部屋へ向かった。凄まじい散らかりようだった。

「片づけましょう。」

「やうね。」

二人はコナンの部屋を片づけを始めた。

「しかし新一はこんなでよく今まで生きてこれたわね。」

「何でも蘭さんが掃除に来てくれていたようですよ。」

「何ですって！－！新一！－！（怒）よくもあんないい子を－－－！（怒）帰つてきたら・・・」

有希子の怒りはどどまるところを知らなかつた。しかし哀の説得でコナンが帰つてくるまでは耐えられそつだつた。

「ただいま。」

「新ちゃん。あなた日本で誰の世話になつていていたのー?」

「やつべ。」

「やつべじゃないわよ。」つてり教えてあげるわ。女心をね。」

その後口ナンは有希子に長々と説教されたのは言つまでもない。

有希子の怒りが収まつたのはもう口が暮れたころだつた。

「じゃあ、ちよつと外に行つてくれるわ。」

「わづすぐ夕食だから早めに戻つてくれるのよ。」

「へいへい。」

口ナンは庭の方へ向かつた。その目線の先には、星を眺める一人の少女。

「あら、明日は雨かしら?」

「はあ、なんでだよ。」

「別に、大した意味はないわ。」

「オメーに渡すもんがあんだけどよ。」

「あら、楽しみね。どこかの道楽息子さんはどうこうセンスしているのかじつくり見せてもらうわ。」

「バーロ。んなもんじゃねーよ。」

「じゃあ何なのよ?」

「こいつや。」

「ナンはポケットに手を入れた。出てきたのは一枚のカードだった。」

「これは?」

「ヒートの全機密情報を見るひとのできるアクセスカードだ。」

「どうして私なんかに?」

「クロヒさんがな、オマーには私の隣で俺やジャックのサポートをしてほしくんだそうだ。」

「アリ。」

「でも、これだけはわからなーんだよ。」

「あら、どんな謎なのかしぃ?」

「ジャックが、どうして俺から渡してくれって聞かなかつたんだ。」

「セリ。」

「どうしてだるいな?」

「わあ。私には……でも、」

「でもって、当てがあるのか？」

「彼が、あなたから受け取ったはつが書ふと思つたんじやないかしら？」

「はあ、なんでだよ？」

「あなたに興味があるから。」

「えつ。」

「なんてね。」

「新ちやん、哀ちやん、」はんできたわよ。」

「さあ、行きましょ。」

(本当に鈍感ね。私たちずっとこのままのまじらへ。)

彼女の思いが空に乗り移ったかのよう、夜は更けていく。

第五話（後書き）

初めて「なんてね。」を使いました。これからもがんばっていきます。そろそろオリキャラ収穫祭が始まると思いますが、よろしくお願いします。

第六話（前書き）

お久しぶりです。このあともテストや修学旅行の準備やらで忙しいので更新のペースが落ちるかもしれませんがあくまでよろしくお願いします。

「ねえ、あなたいつまでダラダラしてゐつもりなの？」

灰原が毎日のように推理小説を読んでゐるコナンに言つた。組織の支部、それもボスのいるところであまりにも気が抜けてゐるコナンに灰原は少々呆れていた。

「うつせーな。まだCTIから何も連絡が入つてないから大丈夫だつてーの。」

「だといいけど。」

「そう言えば父さんと、母さんは？」

「優作さんの次回作の取材のために今朝、一人でフランスに向かつたわ。」

「ああ、そういやーんなこと言つてたな。」

「だから、しばらく一人きりね。」

「だな。」

ロサンゼルスにきてもうすでに一週間が経過した。相変わらず組織の気配は音沙汰ない。それどころかこのビバリー・ヒルズの周りはかなり静かであつた。

「なあ、ちょっと図書館にいかなねーか？」

「どうして？」

「いや、ちょっとここにある推理小説、昨日で読み切つてしまつてよ。だからあつちに行けば何かほかに読んでないやつがあるかも知れないだろ。」

「まあ、たまにはいいわね。」

「じゃあ、支度していくか。」

「そうね。」

一人は身支度を整えるために一度部屋に戻つた。先に準備が終わつたのはコナンだつた。続いて灰原も二階の部屋から降りてくる。

「何だ、オマーにしては遅かつたじゃねーか。」

「悪かつたわね。独和辞典の入つている辞書がなかなか見つからなかつたのよ。」

医学では英語とともにドイツ語もよく使われている。カルテは基本ドイツ語で書くといつ医師もなかなか多いらしい。もちろん灰原がそれを使うのもぐくほんとにたまにだ。

「じゃあ、行くか。」

「ええ、行きましょう。」

戸締りをしてコナンたちが工藤邸の敷地を出た時、向かいの側を歩

いている自分たちと同じ年ぐらいの少年がいた。向こうから挨拶をされたのでこっちも挨拶をすると彼はコナンたちに近づいた。

「やあ、僕はジョイク・ロドリゲス。あの家の使用人の息子だ。」

ジョイクは藤邱のほうとは反対の方向の家を指差した。

「君たちは。」

「僕はコナン・ヒドガワ。こいつはアイ・ハイバラ。俺たちはこの家に居候させてもらってるんだ。」

「ああ、こひらこひ。」

「よひしぐね。」

「よひしぐね。」

ジョイクはコナン、哀、それぞれと握手をした。

「そういえば君たちは何年生なの？」

「今度の九月で四年生さ。」

「へえ、じゃあ、僕と同じだね。」

その後二人は彼からいろいろなことを聞いた。

「じゃあ、学校も一緒にね。よひしぐ。」

「ああ。」

גַּתְּתָה וְעַמְּדָה

「じゃあ、そろそろ戻らないといけないんだ。」

「ああ、じゃあな。

そう言って彼は小走りで家に戻つていつた。

へえ、なかなかの子じやない！」

「ああ、礼儀正しいし、使用者とはいえこの辺に住んでるだけのことはあるな。」

「行わせてしまへ?」

一
あ
「

二人は図書館へ向かつた。

さすがに大きな図書館に行つたので互いにまだ読んだことのない本もあつたらしく二人は夢中になつた。気がつくと閉館時刻の二十分えだつたのでコナンは灰原に声をかけた。

「さうね。でもちよつと待つてもうらえるかしら?」

「わあつた。」

灰原は残りのページを恐ろしい速さで読み切った。

「おい、オメーそれでちゃんと読めたのかよ。」

帰り道、コナンが聞いた。

「ええ。まああれくらい軽い本だつたらもうちょっと早く行けたかもしぬなかつたけど。」

「やっぱスゲーな。毎晩遅くまでパソコンいじつてるだけのことはあるつてか。」

「何よ。それ私が陰気だつて言いたいの?」

「ああ。」

「白状しないと新薬のモルモットにするわよ。」

「はい。・・・大した意味はございません。」

「そう。」

二人はこの後もいつも通りの会話をしながら帰つて行つた。

図書館に行つた日からもう一週間近くの時が流れた。コナンたちは相変わらず平凡な日々を過ごしている。一方の工藤夫妻は、取材から帰つて来たばかりだった。（今は時差ボケで一人とも爆睡中）

「たつぐ、一週間近く家に息子を置いて行くなんて、あの親たちはどんな神経してんだ？」

「さあ。知らないわ。」

「それにしても母さん、新しい服をいっぱい買つてきたけど、何に使うんだ？」

「私は探偵じゃないからわからないわ。」

「一応、少年探偵団の一員だつただろ？」

「そうね。でも私はバスよ。」

こんな会話が一人の起きるまで続いた。

「もうひと睡りしようかしら。」

「まだ寝るのかよ？」

「仕方ないじゃない、優作つたら飛行機の中まで編集社に追われちやつて。」

「なら明日の朝食は私が作りますから、有希子さんは寝ていてください。」

「哀ちゃん、大丈夫?」

「ええ、日本こどるときは私が博士の料理を作っていたし、この探偵さんの世話をしていたしね。」

「もう、あなたって人はまたレディーに迷惑かけたの?」

「迷惑じゃねーよ。向ひが勝手に食べなさいって行つて出して来たんだから。」

「今日は何こじよつかしら? 有希子さん。レーズンあります?」

「多分、あの棚の上に大量に入つてこる瓶があると思います。」

「やつ、じゃあ藤君の朝食はレーズンパンね。」

「何とかそれだけは……」

「じゃあ、じゃあ藤君の朝食はレーズンパンね。」

「じゃあ明日哀ちゃん借りていいかしら?」

「何で俺に聞くんだよ? 今といふことは何も関係ないんだから。」

「ええ。だから有希子さん付合つてこと、藤君の朝食と
はつりあこません。」

「じゃあ、袁けやこの次回作のモルモットでいいんじゃない?」

「それならここわ。」

「勝手に決めんじやねーよ。」

「あら、一田レーズンがここの?」

「はー、すみません。」

「じやあおひつじで決定ね。だナビ袁けやんせ明日、あたしこ
付き合つてしまひわよ。」

「わかりました。」

(意外と幽れんと打ちけ解けてるよしだな。灰原の奴。)

「といひで、新ちゃん?」こいつは今のところも関係なつてこ
とは、将来はどつなの?」

「何でだよ。俺と灰原がどつこつ関係にならつがいいじやねーか。」

「そうね。楽しみしてるわ。新ちゃんの答えをね。」

「へこへこ。」

こんな平和な日はつまでも続くのだからつか?

第八話（前書き）

この撒いた種がうまく咲きますように

「で、何の用ですか？」

「新ちゃん、ちょっと一人になつていいかしら。」

「ああ。」

「ナンは部屋に戻つて行つた。

「実はもつと先の話なんだけど、新ちゃんの誕生日祝いのホームパーティーをやろうと思つてゐる。新ちゃんつたらまた自分の誕生日忘れてるのよ。」

「相変わらずね。」

「でしょ！？それで明日一緒に買う方のプレゼントを選んでもらいたいの。最近新ちゃんがほしいものなんてわからないから。」

「いいですよ。」

「ありがと、哀ちゃん。」

（またパーティーか。）

「で、明日はどこに行く？」

「その前に彼へのプレゼントを考えないと\$%&」

灰原の唇が有希子の人差し指でふさがれた。

「大丈夫よ。もう大体のプレゼントは大体決まっているから。」

「えつ。」

「パリに行つてる間に考えていたのよ。もう揃つてるわ。」

と言つて有希子はパリで買つてきた買い物袋の中身を見せた。

「ちよつと、これつて。」

「わ、哀ちゃんはプリンセスになるのよ。この家の小さなプリンスのね。」

灰原は顔を真つ赤にした。

「何でこんなことを?」

「もつちろん、哀ちゃんの思いに気付かせるためよ。」

「い、嫌です。わ、私は工藤君に思つてもうえ\$%&、」

「哀ちゃん、この前も言つたでしょ。私たちはあなたを恨んでもいいし、むしろ幸せになつてほしいのよ。新ちゃんだつてそう願つてるわ。」

「ぐ、工藤君が!?」

「ええ。新ちゃんいつてたわよ。ハイツはやせしい奴だよ。だつ

て自分の欲望は顔に出さずに周りの人、大切な人のためになら平氣で自分を犠牲にするやつだなんだから。このやさしさは蘭のやさしさとは比べ物にならねーさ。だから俺はあいつの力になりたい。でも俺は無力だ。何にもできなかつた。どうすればアイツは幸せになれるんだろう?」つて。

「い、いつ?」

「去年の秋」日本で新ちゃんに会つた時よ。」

「そうですか。」

「ねつ、だから。」

「でも、恥ずかしいです。」

「・・・そうよね。でも、新ちゃんには哀ちゃんの存在が大きな支えになつてゐるわよ。じゃあ、プリンセスになつてもうつのはあなたのナイトになつた時にね。」

「はい。でもすいません。あなたの計画を・・・」

「いいのよ。これも予想済み。だからこいつもあるのよ。」

有希子はもう一つの袋を出した。この袋は始めて見る。

「い、これは。」

灰原は初めて有希子をす「い女性だと思つた。

「これならいいでしょ。あなたたちの絆のシルシよ。」

「はい、ありがとうございます。じゃあ、戻りやんな方向をおぼるの
？」

「じゃあ……。で」

「わかったわ。じゃあ、明日また会へね。」

（上藤君、ありがとうございます。）

灰原はなぜこで顔で「ナナンの部屋を見上げた。

第九話（前書き）

またまたパーティーです。

第九話

五月三日午前七時。（日本時間四日午前零時）

「こよこよ今日ね、袁ちゃん。」

「はーーー。」

今日は「ナンバー」と、工藤新一の誕生パーティーの日である。本当は四日であるが、日本時間に合わせようとして有希子と灰原の計らいで今日となっている。

「ヒカル、新一は予定通り？」

「はー、うう数日、誕生日のことはなんて一言も言つてこませんでしたから。」

「アハ、さすが新ちゃんね。じゃあ、新ちゃんのことはジョイクに任せて私たちは準備をしてしまいましょう。今日は優作が使えるから力仕事は任せると言つても忙しくなるわね。」

そう、優作は久しぶりの愛息の誕生パーティーといつて寝る間も惜しんで筆を動かし、驚異的なスピードで原稿を書き上げたのだった。

「おまよづ。」

「あら、新ちゃん。早いのね。」

「昨日八時に寝たからな。それに八時半にジョイクと待ち合わせしてゐるから。」

「さう、哀ちゃん。朝食作るの手伝ってくれないかしら?」

「わかりました。」

「ナンは朝食を食べ、ジョイクのいる向かいの家に向かつた。

「優作!! いつまで寝てるの!!? 今日は新ちゃんの誕生パーティーの手伝いをするんじゃなかつたの!!?」

「さうだつたな。」

「早く起きなさい。」

有希子の怒鳴り声が響く。

灰原はキッチンで食べ物の用意、優作は部屋の飾り付け、有希子は全体の指揮と、どちらかの手伝いをしていた。

「哀ちゃん、がんばって。あと一品だから。」

パーティー用なのでかなりの量の食材を使つてゐる。さすがに哀一
人では・・・

「優作、あんたの方が楽なんだから早く哀ちゃんの手伝いをしてや
んなさい。」

そう言つて有希子もキッチンにに入った。一人は息の合つた連携

レーでできぱきこなししている。そこに優作が入って、テーブルの盛り付けが終わった。

「はあ、やつと終わったわね。」

「ええ。こんな事だつたら工藤君に手伝わせるべきでしたね。」

「ほんと。つづづく新一も罪な男よね。こんなにかわくて健気な女の子一人から思われるなんて。」

「それって、蘭さんと吉田さん?」

「じゃあ、三人ね。」

「もう一人は?」

「自分で考えるのね。」

(健氣で工藤君を思つてゐる女の子?私は汚れた女だから・・・誰?)

「有希子、駄目じゃないか。彼女を困らせちゃ。」

「「めんね、哀ちゃん。今のは忘れて。」

「わかりました。」

「そろそろね。」

その時灰原の携帯が鳴つた。

「はい、ジヒイク？」

「ああ、やうだよ。今から出よつと懸つんだけば大丈夫かな？」

「ジヒ ちはホーケーよ。」

「わかつた。」

「今から向かうやうです。」

「やう。新ちやん、見てなや。」

「その頃、

「ありがとな、ジヒイク。お陰でケツコ一楽しめたよ。」

「じひいたしまして。」

「オメー 嘘はジーすんだ？」

「君の家のお母さんがこつちで食べなさいって。みんなの許可はも
らってあるからやうちで一緒に食べるよ。」

「やうか。」

そういふことをしたてて藤邱の玄関ドアの前に着いた。コナンはドアを握った。

ジョイクとの約束を済ませたコナンが工藤邸の玄関ドアを握っていた。その頃ジョイクはズボンの後ろのポケットから取り出し、コナンがドアを開けるのを今か今かと待ち構えていた。

コナンがドアを開けたその時、

「HAPPY BIRTHDAY CONAN!!」

あっけことじられているコナン。この状況を理解しよつにも頭が真っ白になつていて持ち前の探偵スキルが全く働いていない。

「あら、哀ちゃんの言つ通りね。」

「ほんとあなたと会つてからまともに誕生日を覚えていたことがないわね。去年何かは、事件、だとか言つて博士たちが準備していたパーティーすっぽかしてましたから。」

未だ茫然と立ち尽くしているコナン。その周りを全員の笑い顔で囲まれている。

「さあ、哀ちゃんの作ったお料理が冷めないうちに食べなきゃね。さあみんなひつひつこころうつしゃいーーー！」

相変わらずの有希子であった。

「つたぐ、一言ぐりこ言つてくれよな。」

不機嫌そうなコナン。

「大体誕生日を忘れているお前が悪い。」

的確な反論をした優作にコナンは何一つ言葉を発せられなかつた。

「さてと、そろそろいい頃合いね。」

と言つて有希子はリビングを後にした。

「さあ、あなたの元女優のあの人があの人がどんなプレゼントを出してくるか楽しみね。」

「別に、二十一になつて”#\$%&”

「ふふ。」

「お待たせー。コナンちゃんへのプレゼントよ。」

すると有希子は全員に帽子を配つた。男女に色の差はあるが、コナンはカジュアル系のおそろいのものだつた。

「これは私たちがお互いに抱いている愛情、友情、信頼、の証よ。」

「証……。」

「そう、どんなに苦しくても頭の上にあるこの帽子を持っている人の気持ちを忘れないよつこね。」

「ありがとな。母さん、じゃなくて・・・」

「いいのよ、母さんで。もうあなたたち一人は私たちの子供同然よ。」

「

「わあつたよ。母さん。」

「ええ、ありがとう、コナンちゃん。」

「といふで、工藤さん。」

ジョイクが口を開いた。

「有希子さんでいいわよ。」

「はい。僕までこれをもらつてもいいんですか?」

「当然よ。あなたは「ナンちゃんがこつちに来て一番最初のお友達だから。仲良くしてあげてね。」

「はい。ありがとうございます。」

「じゃあ、みんなで写真撮りましょーーーー!。みんな並んで、並んで

「!」

「つたぐ、しょうがねーな。」

「あなたの隣かしら。」

「もう見てーだな。」

「じゃあ、失礼。」

「タイマー押したわよーーー！」

「はあ。」

「あら、浮かない顔ね。」

「だりーんだよ。」

「じゃあ、いつかの金田一君みたいに・・・・」

わあ、たよ、笑えはいいんだろ。

カシャア！！！アテツシエがたかれた。

「よく撮れてる」

「これで二三ヶ月のサマーテイストハーフマラソンには終りを告げた

第十話（後書き）

灰原のいつかの金田一君のようになると、D5の「めぐり合つ一人の名探偵」のラストシーンからです。

第十一話

あの誕生パーティーからしばらくの時間が過ぎた。コナンは相変わらず推理小説を読んだり、庭でリフティングをしたりとマイペースな生活を送っていた。

「ちょっと、出かけて来るな。」

コナンが灰原に向かつて言った。

「あら、今日は彼なしなのね。」

そう。最近コナンが出かけるときはいつもジーハイクと一緒になのだ。

「ああ、ちょっと晴らしに公園にな。じゃあ、母さんこまつまへ言つておこしてくれ。」

「はいはい。」

そう言つてコナンは出て行つた。ちなみに優作は出版社の集まり、有希子は買い物で家を空けていた。灰原は有希子が作った研究室に向かつた。

（何とかしなきやね。蘭さんに寂しい思いをさせて、私だけいい思いをしてくるのだから。）

コナンは公園に着いた。広い公園の中にある大きな壁の前に立つた。屋下がりの日光を背にコナンはボールをけり出した。まるで本

物の小学四年生のよつ。

「ただいま。あら、哀ちゃん。新ちゃんは？」

有希子が灰原に声をかけた。

「さあ、公園に行くとは言つてましたけど・・・。

「わ、それで、夕食の用意をしたこと。」

「はい。」

いま藤邸の夕食は有希子と灰原の二人が用意している。これほど家の家に住んでいるのに使用人がいないことを灰原は不思議がついていたが、その理由が今日明らかになった。それは有希子の愛車であるジヤガーのチューニングや維持費に莫大な費用がかかっているからだ。さらに手間と時間もかかっている。

() 今までしてこの車にこだわりがあるのね。

と灰原は心の中で冷やかした。と、同時に同じように車にこだわりを持つている組織のメンバージンのことを思い出した。ただジンは今日本にいなため、かつてのような怖がる仕草は出なかつた。

「哀ちゃん、じめん、そここの棚の中から、小麦粉取ってくれないかしら。」

フライパンに有希子はバターを溶かしてこる。じつやホワイトソースを作っているようだ。

「はい、有希子さん。」

灰原が有希子に小麦粉の入った袋を手渡した。

「ありがとうございます。ほんとに哀ちゃんがいてくれると助かるわ。家の男どもは包丁すらまともに使えないから。」

「いえ、でも彼らの料理の腕がなかなか上がらないのも大きな謎ですね。」

「ほんと。」

その後もてきぱきとキッチンを作業をするふたり。

「そう言えば、新ちゃん遅いわね。哀ちゃん、もう一人で大丈夫だから新ちゃんを呼んできてくれない?」

「わかりました。」

灰原は身支度をし、薄暗い玄関ドアの外の領域に足を踏み出して行つた。

第十一話（後書き）

これから受験体制に入るるので、少し更新が遅くなります。

灰原は走った。息を切らしながら懸命に。自分の身を守るために。そして何より彼女にとつて一番大切な人のために。

(まさか彼らに居場所を知られたのでは?)

と灰原は考え、もう体力的には限界を超えていたが彼のことを心配する気力が先に足を動かしていた。

しばらくして灰原は公園に着いた。そして公園に入るなり彼の名を呼んだ。

「工藤君！－工藤君！－」

いくら呼んでも返事が返つてこないことに灰原は焦った。そして組織への恐怖心が込み上げてきた。しかし、灰原はなおも呼び続ける。しばらくしてコナンがボールを当てていたと思われる壁の前に来た。壁の後ろには彼が蹴つていてついたと思われる跡もあった。その近くに引きずったような足跡が続いている。

(まさか、本当に彼らに。いや、彼らならあんな後は消すはず。ましてやこの時間にならないとこの公園は人通りが少なくならない。じゃあ、彼はまだこの公園の中のはず。)

この状況から達した考察に基づいて灰原はコナンを捜索を再開した。

そして芝生で寝転んでいるコナンを見つけた。

「あなた、こんな時間まで何やつてるのー!?」

「何だ、灰原か。」

「何だじゃないわよ。どれだけ心配したと思つてのー彼らにひきひりあがめられたかとおもつたじゃない!…」

「わりーな。携帯は電池切れで、おまけにちゅうとやつすがりまつてもう体が動かなくなつてしまつたんだ。」

「そ、う。じゃあ、帰るわよ。」

灰原は有希子を心配せまこと早く帰るよつてコナンを促した。しかし当の本人は

「待てよ。オメー汗だくじやねーか。ちょっと休んで行こうぜ。」

結局灰原は「ナンの言つたことにのつた。実際灰原の体力も限界を超えていて、コナンを見つけた瞬間から疲れを忘れさせていた張りつめていた緊張感が切れてしまつていた。灰原はしぶしぶコナンの隣に寝転がつた。

「なあ、俺たち、初めて会つてからもう三年だな。」

「そうね。」

満点の星空の下、彼らの話は雲のよつて弾んでいく。

「最初、オメーには面食らつたぜ。いきなり黒ずくめの奴らの仲間で阿笠博士の家に住んでるなんて言い出すんだから。」

「あら、そんな現実味のない私の皮肉つた言葉と、組織の気配を醸し出した私の演技に引っかかった間抜けな探偵さんにもショックを受けたわ。これじゃあジンに小さくされたのも頷けるわ。」

「おいおい。仮にも一度命を助けた奴に言ひづ言葉か？」

「あら、私も何度もあなたのことを助けた記憶があるんだけど?..」

「やうだつたな、」

第十一話（後書き）

明日から修学旅行で海外に行つてきます。
なので一週間は更新できません。ごめんなさい。次回もお楽しみに。

第十二話（前書き）

みなさん、お久しぶりです。いやあ、オーストラリア・ケアンズに四泊六日の修学旅行はとても面白かったです。とにかく自然が壮大を感じてきました。僕の文もあれくらい広いものがかけたらなあと憂鬱になっています。

「最初、オメーにはひでー」と言ひちまつたよな。オメーは何も悪くないのに……。」

「言われて当然よ。結局あの頃はあなたたちから憎まれ、組織からは必要に迫われていると思い込んでいたわ。でも杯戸シティホテルの一件の時や、バスジャックの時の自分のことを省みずに私を助けに来てくれたあなたを見て、この人なら信用できると思った。」

「それはこっちもさ。オメーがいなかつたら今頃組織に殺されいるだろうな。事件に没頭しすぎて熱くなっていた時に水を差してくれたり、俺の手伝いをしてくれたり、俺にとつては蘭以上に大切な存在かも知れない。」

「それは自分の身を守るためにやつてのこと。だから本当に私は嫌な女だわ。あのエンジニアのような蘭さんの方がいい人だわ。だから、私はあなたにとつての一番にはなれないの。」

「バーコ。それはオメーが決めるんじゃねーよ。俺が決めるんだ。」

「フフ。相変わらずに気障なのね。」

「でもオメーが今の俺にとつて大切な存在であることは間違いない。だつて江戸川コナンが生まれたのは、オメーのおかげなんだから。」

「だからと云つてすべてが結果オーライとはいかないわ。事実あの薬で空の上でしか生きられなくなつた人たちがいるのだから。」

「ああ。それは償わなきやなれらねーことだ。だからといってオメーという人間性を否定することはできないぜ。もし、オメーがその重荷に耐えきれなかつたら俺も一緒にそれを背負つてやる。オメーと同じことを経験した俺なら、きっとオメーのことを支えてやれるから。」

（やつぱりあの時の）人を頼つてよかつた。）

「フフ。最初にあなたに言つてキレられた言葉と一緒にね。」

「もうだな。」

「頼りにしてるわよ。探偵さん。守ってくれるんでしょ？」

「ああ。死んでも守つときつてやる。」

「ありがと。」

彼らにはとても強い絆が生まれていた。それは新一のころにはあまり感じないことだった。サッカー部で全国大会を目指していたころにはそのようなこともあつたが、パートナーとして、ともに信頼できる相棒としてのかけがいものはコナンにとってはじめてのかんじょううだつた。

「ああ、そろそろ帰りましょ。もつ歩けるわよね？」

「ああ、もう大丈夫だ。ありがとな。」

コナンはサッカーボールを足に吸いつかせ、自分の周りを自由自在に浮かせながら歩き始めた。灰原はそれを隣でやさしく見守つてい

た。互いの心の距離が縮まつたせか、いつもよりも一人の距離が遠く感じられた。

第十二話（後書き）

書き方を変えて見ました。これからはこの書き方で行きたいと思
います。

第十四話（前書き）

お久しぶりです。

第十四話

「おいおい、大丈夫かよ・・・。」

「じめんなさい。迷惑かけるよつた真似をして。」

灰原が倒れたのだ。理由は過労と寝不足だった。

「何でこんなになるまで・・・。」

「私は、私の責任を果たすために・・・。」

長い沈黙。

「数時間前」

「おい、オメー大丈夫か？」

「ええ、寝不足はいつものことでしょう？」

いつものような愛想のない言い方だったが、コナンには一目でわかつた。灰原が無理をしていることが。

「まあ、いいや。で、今日オメーはどうするんだ？つておい灰原！
！灰原！――！」

「現在――」

「オメーの責任・・・。」

「そう、私が組織にいた頃にしてしまった過ちを償つため。そして、自分自身へのけじめのために。」

「そうか。」

そして悲しげな瞳をしていた彼女がコナンのことを見つめた。

そのとき、コナンの中に眠っていた「何か」が脳内を侵略し始めた。今まで生きてきた二十数年の間に一度も味わったことのない感覚。コナンに抑えるすべはなかつた。

コナンの体はビリビリにもならなかつた。そして彼は求めた。

太陽のよみに白く光り、とても温かい彼女を。

そして彼は正氣を失つていつた。しばらく彼は彼女にすがつた。

その後周りの音が彼の鼓膜に突き刺さり、彼は求めていた手を離した。

そして自分が何をしていたのかを理解した彼は、部屋を後にした。

(何だったんだ。あの感覚は！？)

自分の部屋に逃げたコナンはさつきのことを思い出していた。

コナンの胸には疲労で熱くなつた彼女を抱いた温もりが今も伝わつ

てへる。

(どうしてなんだ? 僕はずつとは蘭を思つていた? あれ、どうして過去形なんだ?)

(俺はどうじつもつたんだ?)

自分の恋心には疎いといわれていたコナンだったが、それは疎いのではない。

感じたことがなかつたのだ。

自分の中の欲望に満たされ、理性が止めよつとしてこゝにも関わらず手を出してしまつ感覺を。

かつて新一だつた時に蘭と学園祭で劇をやつた時にも回じみつないとをした。

しかしこんなに後ろめたくなつただらうか。

学園祭の時は園子の言われた通りにさせられたままだつた。
だから本当に異性を求めたのは、初めてだつた。

(なぜ? こんなことを思つているんだ? 蘭にもしたことがあるだろうが! なのに、どうしてまだこんなに胸が熱くなるんだ? どうしてあいつを抱きしめたいという独占欲が出たんだ!?)

コナンは考へ、答えを見つけた。そして自分自身へのけじめをつけようと決意した。

第十五話（前書き）

どーも。この前はコナン目線で書いたので、今回は灰原目線で書きたいと思います。（なので一人称は灰原のことになります。）

彼はどうしてしまったのかしら？

何度もこの言葉が頭の中を駆け巡っていることだらう。
あれほど蘭さんのことを思つていた人がこんな私なんかに・・・。
でも、嬉しかつた。彼の心の中で大切な人だと思つて・・・。
いえそんなはずはないわ。そうよ。

私は恨まれてゐる。彼の人生を狂わせてしまつた魔魔。

もうどうすればいいの？工藤君のことは何度も忘れようとした・・・。
なのに忘れようと思えば思つほど、彼のやせじわを思つて出しちま
う。

私は今まで一人だつた。

そんな私を仲間として共に過ぎてゐた日々。

米花町での思い出。

その思い出の中心は彼。

いつだつて私の隣にいてくれて、暖かい人たちにめぐり会わせてくれた。

いつだつて私のことを守ってくれた。

杯戸シティホテルの時も、バスジャックの時も、。

そして、もう一人。

彼の最愛の人にも。

ベルモットに銃口を向けられ、ほんとに最期だと思った時に舞い降りたエンジエル。

悪魔を助けるなんてほんとどんなにエンジエルよ。

そう、あんな白くまぶしい彼にふさわしい最高の女神。

今度こそ忘れられそう。

なのにわざわざの彼の温もりが今も私の体と心を包み込んでいる。

何で私なんかを照らすの？ なんで白い彼を求めるの？

早く告白してほしい。いやもうしてたわね。

簡単には手に入れられないモノをあなたは手に入れているのに。

だから愛しているモノをそのまま素直に愛して。

そしてもう私が見ないで。

やせじくしないで。

だからもう私が彼にできることはただ一つ。

早くあのHondjorのもとで彼を返す」と。

第十六話（前書き）

お久しぶりです。随分とネタに詰まってしまいまして、やっと投稿することができました。これからもよろしくお願いします。

あれから数日がたつた。

灰原の風邪も治り、解毒剤の研究を再開している。だが、コナンとの関係は未だに気まずいままだった。

一方のコナンも自分の気持ちにけじめをつけようと必死に考えたが、その答えは見つからなかつた。そんな自分に腹を立てようとしたことも何度もあつた。だが悩みの「種」のことを思えば思つだけ、ある結論に達しようとしていたが本人はそれを一切認めようとしなかつた。

そんな時、

「あれ、母さん? どうしたんだよ?」

「ああ、新ちゃん。実はね、優作つたらまた出版社の若い娘と飲んでたのよ。それも今回で五回目。いい加減にしてほしいわね。」

「わうなんだ。で、母さんはどうするの?」

「あんな男はもう飽きたわ。もうこの家に入れるもんですか!-!」

(こや、こじの家の金、全部父さんの金だら・・・。)

「わう」とだから、新ちゃん。あの人の荷物全部まとめておいて。

「

「何で俺なんだよー。」

「だつて、あなたいつも推理小説ばっかり読んでるじゃない。これで少しせっかうれつするぜ。それに、新ちゃんの歯みだつて……。」

「何で俺が歯みなきや二ヶねーんだよ。」

「あら、だつて新ちゃん迷つてるんでしよう。新ちゃんなんか蘭ちゃんなのか。でも今の感じだと哀ちゃんに傾いてる感じだね。」

「何でんな」とが。

「新ちゃんの顔に書いてあるわよ。」

（つたへ、Jの母親は……。）

「ああ、やうだよ。」

「やうか、新ちゃんに口つづいたんだ。」

「バーローーんなんじやねーよ。」

「新ちゃん、顔赤いわよ。」

「何言つてんだ。タトのせこだよ。」

「まだ田せこだよ。」

二二七

七
ノ
文
の
と
わ

「有希子！！彼女にはもう近づかないから入れてくれー！！」

—入れてあければ?—

卷之三

有希子がすこい形相でコナンを睨んだ。

有希子、お前の方がキレイだから。

そんなお店で、とても無駄よ。」

頼む！！！」

その後、優作の懇願は一時間にも及んだ。有希子もついに勘弁したのか、

「入つて。」

と冷たい声だつたが、優作に手を差し伸べた。

(俺も、あいつに伝えなきやな。本当気持ちを。)

コナンは暖かな目で見つめていた。

第十六話（後書き）

灰原が出てこなかつた！！！

第十七話（前書き）

どうも、久しぶりです。今回から超大シリーズの第一部。
の開幕です・・・。
L.A.編

父ちゃんと母ちゃんの喧嘩からまた少し時が流れた。

あれから、ふと思つと灰原を探していた・・・。

蘭はいつも俺の傍にいたから、そんなコトをしたことをなかつた。

それだけ俺は灰原が好きなのかな・・・。

自分で自分の気持ちがわからない・・・。

そしていろいろと考え始めた。

しばらくして、灰原が俺の傍にやつて來た。

「よひ、どうした？」

「さつきから蘭さんから電話が來たわ。それで新一さんが今ロスにいますつて言つたら、今からこっちに來るつて。」

「おい、そんなコトを勝手に言つなよー正体がバレたらビリするんだよーー！」

「大丈夫よ・・・。これ、見て。」

と言つて灰原が出したのは一本のカプセル。

「オメー、これ、まさか・・・・・

「やつ、察しがいいわね。これは私が作った「APT-X4869」の試作品。今までのものよりもかなりいい感じに仕上がったと思つわ。」

「じゃあ、オメー・・・・・

「やつ。どうすれば飲まざるを得ないでしょ?」

「これはほとんど脅迫だぜ・・・・・。」

「やつね。まあ、急いで準備しないと彼女が先に来ちゃうわよ。」

「やつだな・・・・・。」

そう言つて口ナカンは有希子や、ジョイクに話をつけて、新一がいる状態を創つていつた。

「後は、上藤新一を出すだけだな・・・・・。」

「やつね。一応言つておくけど、薬の効く時間はせいぜい三日間。その間は風邪の症状が付きまとひつけど・・・・・。それと毎朝私のところに検査をするつもりだから・・・・・。」

「構わないさ・・・・・で、蘭は後どれくらいでくるんだ?」

「やうね。冒前にこれから飛行機に乗るつて言つてはいたから、ちょっと待つて・・・・・。」

そう言つて灰原は、ネットでその便の時間を調べ調べ始めた。

「あつたわ。到着は今から一時間半後よ。」

「ちようどこいな。じゃあ、母さんと行つてくるわ。」

「わうね・・・。気をつけて。」

「おひ。」

（これで・・・よかつたのよね・・・。お姉ちゃん・・・。大丈夫
よね・・・。あの二人なら・・・。）

灰原は少しあびしげな眼差しで新一を見送つた・・・。

第十八話（前書き）

あらり、PC壊れちゃった！！

でも直したもーん！！

受験も執筆も頑張ろう！！俺！！

「冷やし中華の季節が、はじめました。。。」

第十八話

（やれやれ、あこひは・・・。）

新一は窓を流れる摩天楼たちの流れを眺めていた。

すると有紀子が口を開いた。

「新ちゃん・・・。哀ちゃんはどうして・・・。」

「さあな・・・。ただ日本にいたときから蘭のことをよく話していたからな・・・。」

そう。

いつもそう。

新一は「」で初めて疑問に思った。

（アイシははどうして俺たちのために動いてくれるのだ？）

蘭 side

「はあ、長かった。」

「一年ぶりに」Aの地に降り立つた蘭。

（新一、怒つてないよね・・・。）

すこし気が重い・・・。

一番最初に新一に向ける顔が思い当たらなかつたのだ。

電話で言われた場所でしばらく待つといふと、一年前に乗つたジヤガーがやつてきた。

「ほんにちわ。お久しぶりです、有紀子さん。それとそこの大馬鹿推理オタク。」

（何言つてゐるの、私・・・。怒られるに決まつてゐるじゃんー。）

しかし新一の返事は、

「いいから、早く荷物乗つける。」

といつ素つ氣のない言葉だつた。

蘭は余計に不安に駆られ始めた。

- C T U t y p e B 本部 -

CTUオフィスの一階。

長官室のパーマーの部屋に一本の内線が入つた。

「パーマーだ。」

「大統領、私です。」

「ジャック、どうした？」

「L A 港から、入港しているはずのタンカーが消えたという連絡が
たつた今入りました。」

「わかつた。至急包囲網を編成し、一時L A 港を封鎖する。」

「了解。私は現場に向かいます。」

ジャックは急ぎ現場へと急行した。

・工藤邸

新一は自分の部屋にこもった。

解毒剤の風邪の効果が効き始めたためであつた。

それ以外の人間は、全員リビングにいた。

その中で一番辛そうな表情していたのは、蘭だった。

「新一、大丈夫かな？」

「大丈夫よ。新ちゃんは・・・。それより蘭ちゃん、これから買い物に行くんだけど、付き合つてくれない？」

「わかりました。」

「優ちゃん、新ちゃんに何があつたらでんわしてね。」

「もちろんだとも。」

「いつて有紀子と蘭は「Aの町へ向かつて行つた。」

第十八話（後書き）

動いてねー。これからもがんばるよ。うん・・・。

第十九話

「「めんね、蘭ちゃん、新ちゃん機嫌悪かつたらしくて……。」

「いいえ、押しかけて来てしまった私も私ですから……。」

重かつた。

言葉以上に蘭は悲しく見える。

蘭は外を眺めることができなかつた……。

それは初夏の陽気のLAの太陽がまぶしかつたからだけではない。

車はさらに地面をけり続ける。

タイヤやサスペンションは軽快に動いたが、アイドリングが重かつた。

いや重くなつたといつぱうが正解だらう……。

有紀子は原因を考え始めた。

しかし思いつくことは何もなかつた。

OHは先用だつたし、足回りは何も問題がない。

変わつてしまつたのは、新一を今日乗せた時だつた。

そして蘭を乗せた今、さりに重くなっている。

「」で彼女はとても現実とは思えない考へに達した。

（まさか、乗り手のキモチと車がシンクロしているの？）

そうとしか思えなかつた。

なぜなら車とは機械といつ心をもつた生き物なのだから・・・。（

By 湾岸 Midori Page t）

・工藤邸

「何で蘭は・・・？」

新一は頭を抱えた・・・。

自分を憎んだ。

自分がいなかつたら、蘭はあんな顔はしなかつただろう、と。

するとノックの音が聞こえた。

「江戸川君？ 入るわよ。

哀の声だつた。

「ああ。」

「大丈夫？」

「ああ、何とかな。」

嘘だ。

体も心も大丈夫ではない。

「そう。」

哀は悲しそうな顔で見つめた・・・。

新一の顔は汗だくで、脈はフルマラソンを終えた選手のようだった。

「灰原、ちょっと寝かせてくれないか？」

重い沈黙を新一が破つた。

「わかつたわ。」

灰原がベットの横の椅子から立ち上がった。

去り際に灰原がつぶやいた。

「がんばってね・・・。」

新一は返事を返せなかつた。

第十九話（後書き）

重いですね。これは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8640n/>

Mr konann edogawa

2011年10月7日23時37分発行